

術眠催  
法療治新

版藏所習簿術眠催



96  
402

序

近來催眠術の研究は、洋の東西を問はず、翻々益々旺んに行はれつゝあるの  
 で、吾邦でも其の研究者や施術者が日に増し殖むる傾きで、寄るよ接るよ斯  
 術の談論を耳にするといふ有様なのである、  
 其處で編者は其の研究または施術者の参考にもと、曩に催眠術に關する一  
 書を著して、其の學理と方法を説き明かし、世に公にしたのであるが、本書  
 はまた其の催眠術を應用して諸種の病患、性癖等を治療し矯正する方法を、  
 學理上に基きて説き明かし、一般斯術の研究者及び施術者を資せんとするの  
 である、  
 吾來世間では、病患の治療法と言へど、單に醫術に限つたものゝやうに思つ  
 て居たのであるが、實際に於ては決して其うばかりではなくて、随分と他の  
 方法でも治療を施して居たものである、特に此の催眠術は昔から醫術の一  
 方法のやうに用ひられてあつたのである、が併し其れは行はれて居た事は事  
 實であれど、言はゞ無我に行はれて居たので、斯ういふ事をすると病患を容  
 易く治癒し得らるゝ、——、我が腕前が優れて居るの——であらう、——既  
 一、皆てよ——、何うして居らん——、けれども治りさへすれば宜しい

明治  
 37 1 29  
 内交

「だが奇妙だ、我れながら不思議だ」と、其の方法を行つて居る施術者自身さへも、奇異の感に打れながらに行つて居たのであつた。然るに近年學術の進歩に伴れて、奇妙さか不思議さか思はれて居つた其の治療法は、全く催眠術といふ心的療法で、學理を推究して見ると、些とも不思議でない奇妙でないといふことが解つて來たのである。本書は、すなはち此の催眠術を應用して諸種の病患を治癒せしむる其の治療法を、學理と古今大家の實驗や研究に依つて、簡明に説き示し、また方今歐米諸國并に我邦にも行はれてゐる最新なる方法を網羅し、其の確實なるものを摘載したものである。従つて、専ら實用に適切なもののみであるのだ。もつとも本書は主として其の治療に關することを陳べたのであるから、催眠術一般に就ての事は、些か畧した点か住々あるのだ。其うして其の一般の現象及び施術の方法等の事は、既に著したる「簡易速成催眠術」に悉く書てあるから、兩々相参照せられたらば、一層何れも斯く解るのである。だから若し此本だけで解り難い事があつたならば、彼の本を讀まれん事を望むのである。

編者誌

# 催眠術新治療法目次

緒言.....一

第一章 催眠術の發達.....三

第二章 醫術と催眠術.....一七

第三章 各國醫學界に於ける催眠術の研究.....二二

第四章 催眠術に對する醫學界の反對に就て.....三〇

第五章 催眠療法は暗示の作用なり.....四五

    暗示療法の実例.....五八

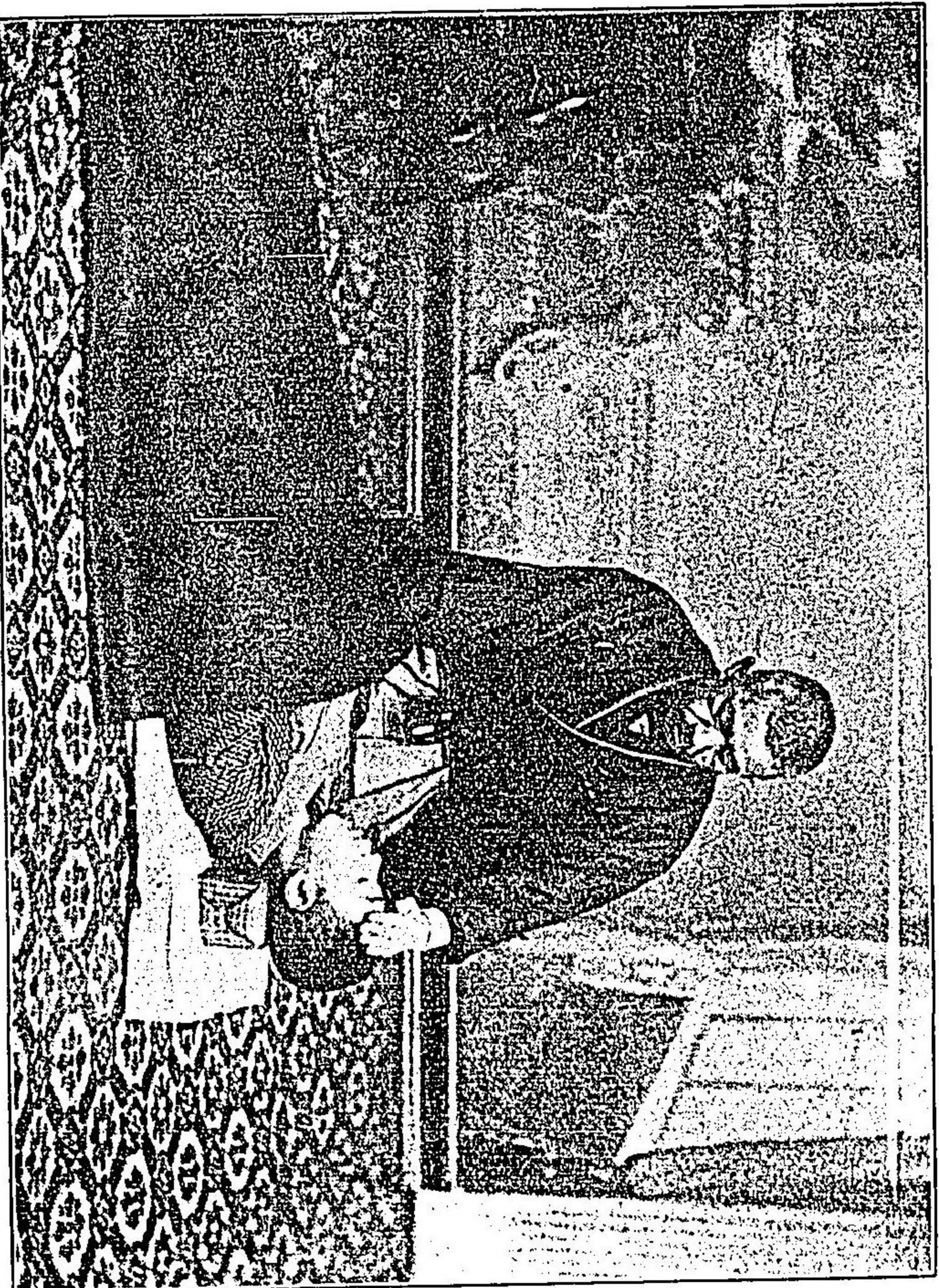
第六章 催眠療法は如何なる種類の病患を治療し得るか.....七四

第七章 催眠状態の生理的徴候.....八一

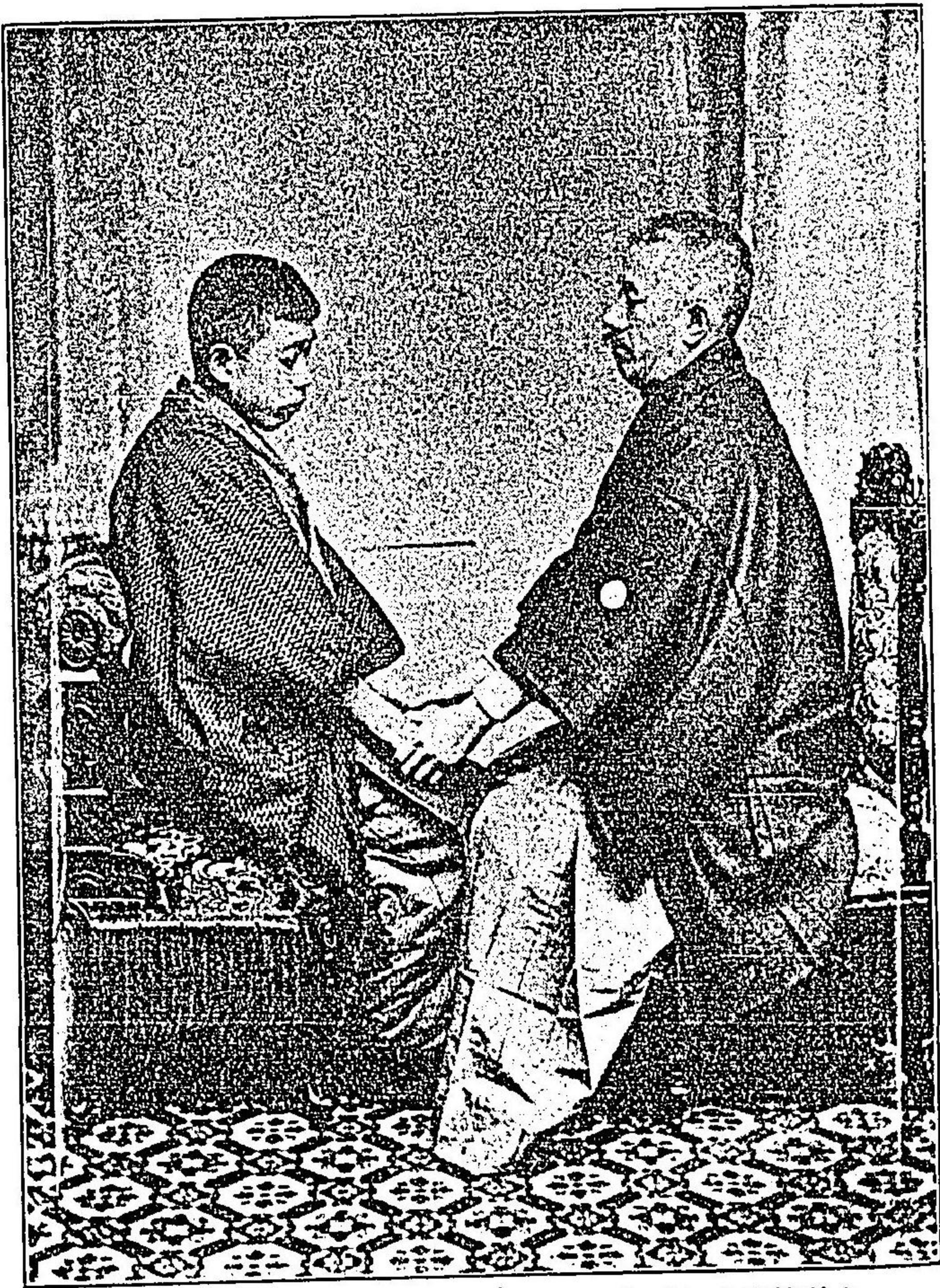
第八章 催眠状態の心理的徴候.....一一一

第九章 催眠状態の性質と他の類似状態との比較的説明……………一三四  
精神錯亂と催眠状態……………一三八  
ヒステリーと催眠状態……………一四二  
昏睡病と催眠状態……………一四三  
カタレプシーと催眠状態……………一四六  
麻痺及び麻酔類似病態と催眠状態……………一四八  
第十章 催眠療法施術者の人格及び必要なる智識……………一五一  
第十一章 施術に關する注意……………一五九  
第十二章 治療の効果は研學と熟練とに由て生ず……………一六九

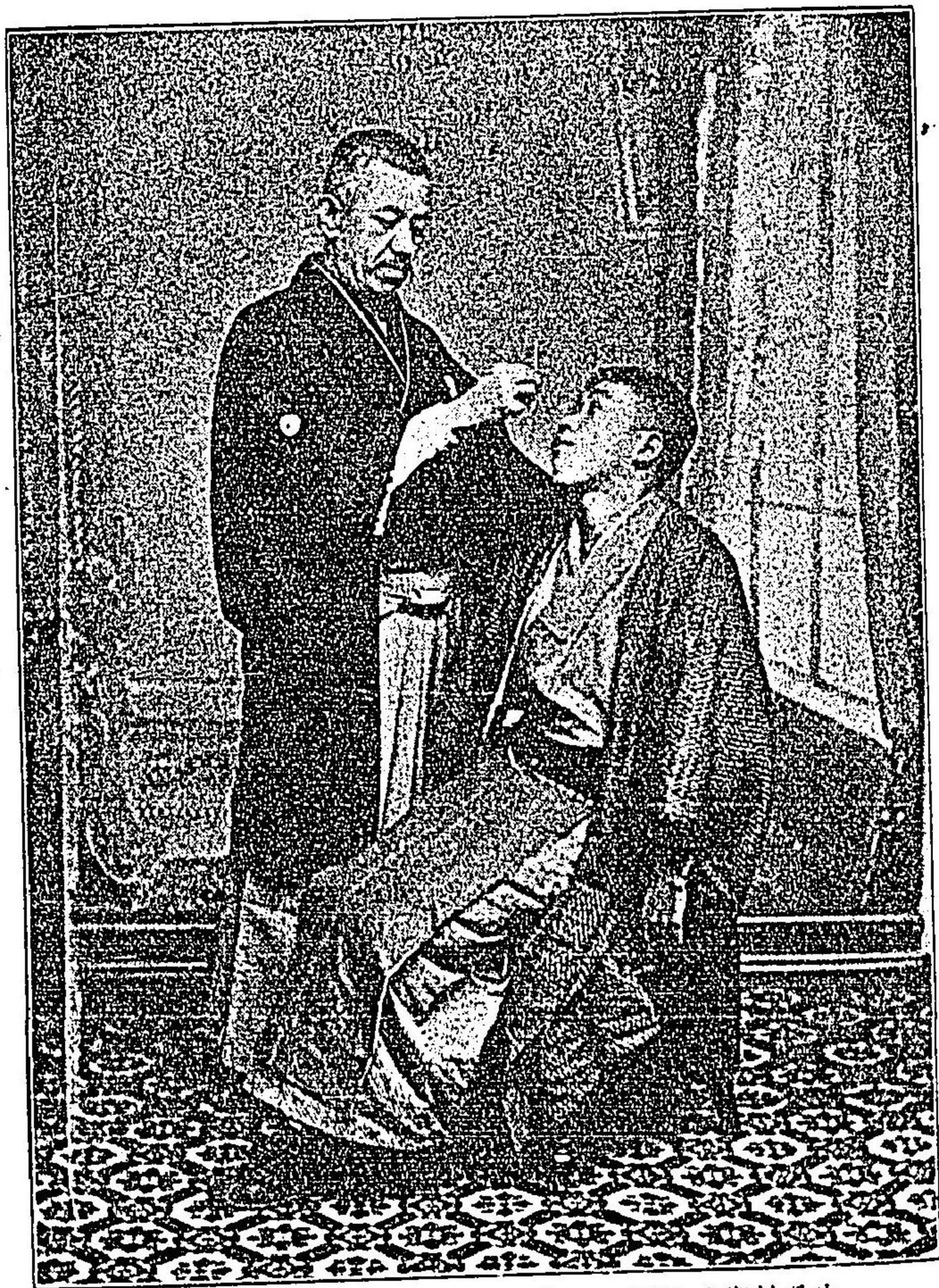
催眠術新治療法目次畢



るあて法の瓦限中式術請リヲ式術る保に明象の氏平藤野ハてに式新原的理生



心を治め眼を閉じて手先の術を以て式術の理心を  
示すは者術の被ばいゆ其を示す暗る睡てし對



生理的的式にてソレを視せしむるに之れは視神  
疲勞の結果のてのる

# 催眠術治療法

日本獎勵會校閱

## 緒言

催眠術をば魔法とか妖怪術とか言つて居る者もあれば、また其う想つて居る人も世間に澤山ある、併し其れは昔の催眠術のことや、或は催眠術を施された人間は斯う々々いふ状態になるとかいふ、其の現象のみの話を聞いて、未だ催眠術といふものは、何ういふ性質のものかまた何ういふ學理から施されるものかといふ、其の理由を知らないからして、其ういふ想像だの憶説だのが起るので、其れも強ち無理とは言へないのである、されど現時の催眠術は決して其ういふ奇怪な

法でもなければ、不思議な術でもなく、全く確實なる科學的基礎の上に立ち、一定の學理に據つて施されて居る科學的の術なのであるが、唯だ一見した所では、實に不思議な状態である、催眠術を施されると、恰かも眠つて居るやうに見えて、其の實普通に睡つて居るのとは異つた、まことに奇妙な状態になり、其うして自分の意志の働きは全く無くなつて了ひ、何でも施術者の言ふ通りになる、其れから施術者の命令することは、催眠されて居る間だけ行はれるばかりでなく、醒めたる後までも矢張り其の影響を及ぼすのである、また其の影響は單だ精神上に及ぼすだけではなく、身軀上にも色々の變化を起すものである、されば種々の機能的病患の如きは、唯だ施術者の言葉一つで忽ち平癒することがある、斯ういふやうなものであるから、催眠術の學理の解らない人は、此の現象を見て不思議だとか、奇怪だとかいふ感念を生ずるのである。

凡て世間の事物殊に學問上より考へねば解らぬ事柄は、普通の人の目には不思議

ども奇性とも思はることが澤山にある、併し其の不思議なことや奇怪なことでも、平常見馴れて居たりまた其の理窟が解つて來ると、何とも思はず氣にも留めぬやうになるのであつて、催眠術でも段々盛んになつて、世間一般に行はれるやうになり、また其の理窟が解るやうになると、誰れも氣に留めぬやうになるは必定である、催眠術で病氣の癒るのも、藥劑で病氣が治るのも、道理上から言つて見れば少しも異つたことはないのだ、殊に近頃行はるゝ催眠術は、昔しの行り方とは全く違つて居て、人を催眠状態にするのも、暗示で病患を治すのも、皆すべて一定した學問上の理窟から割り出して行ふのであるから、丁度醫術を以て病人を治療するのと、道理に於ては毫も變らないのである。

## 第一章 催眠術の發達

世間では催眠術といふと、極めて新しいものゝやうに思つて居る人が多いのであ



るが、實際は極昔から方々の國々に行はれて居たもので、決して新規なものではない、唯だ催眠術といふ名が附いて居なかつたから、誰れも其のやうな古いものとは知らず、つひ此頃發明された奇態な術であると信じて居るのだ、世の中の物事は何でも大抵は此の通りで、昔しから在つたことでも、誰れも氣が附かずにまた氣が附いて居ても理窟が解らないので、名を附けることも出來ず、其のまゝにして済して居たことをば、智慧の優れた人が出て、其れに氣附きました其の理を研究して、始めて適當な名を附けると、世間では何の考へも無しに、其の人が新規に發見したもゝのやうに言ひ囃して、珍らしいことが目附いたとか、不思議なものが出来たとか思ふのである、併し何も新規に發明した譯ではなく、誰れの目にも觸れて居たのを氣附かなかつたのと、其れに一定の名を附けて、此のことは斯ういふ理窟から生ずる、此のものは斯うするとかいふ極めを附けただけである、だから世の中の物事は、其の理窟さへ解れば何のこともないのだ、

其れを其の理窟も解らず考へることも爲ないで、唯だ不思議だとか、奇怪だとかいふのは、畢竟自分の無學無識なる風聽するのと同じことである、催眠術とても其の通りで、昔しから行はれて居たのであるが、其れを見たり聞いたりしても、何かなしに單だ不思議な事があるものだ、是れは人間業ではない、神佛の力に依るのだとか、または魔法だとか、妖術だとかと、道理も何にも解らずに、また其の道理を知らうとする考へも起さずに居たのである、其れならば此の催眠術といふは、何れの時代から行はれて居たものかといふと、其れには著者も判然とした説明は出來ない、が併し種々研究して見ると、何うやら人間が此の世に創めて生じた時分からあつたものらしい、其れも確かな證據を擧げることには出來ない、畢竟道理上から推し考へたのである、而して之れは著者一人の考へではない、歐米各國の有名なる學者や研究家なども、同一の説を立て居るのである、其處で此の催眠術は古くから行はれて居たことが何うして解るかといふに、彼の

魔法だとか、秘術だとか言つて、昔しから方々の國々に行はれて居たものは、大抵此の催眠術と同じ行り方で、また其れから起る結果も同じであるから、其れが解つたのである、されど其の魔法とか秘術だとか言つて行つて居た人も、實際自分で其の理窟が解つて居て行つたのではない、不圖したことから其れが行はれるやうになつたので、誰れに致へられたといふこともなく、また自分で研究して考へ出した譯でもない、だから自分で其の法を行ひながら、自分は何うして斯ういふことが出来るのであるか知らん、是れは自然と具はつた徳だとか、また自分の信仰する神佛の力に依るのでとか、或は神佛が世の人を救ふ爲めに自分の牀に憑つて施さるゝのであろうなどと、何んの考へもなしに單だ器機的に行つて居たのが多かつたやうだ、が併し世の進歩するに従ひて、追々其れに疑ひを起し、是れには何か原因が無くてはならぬ、是れは一つ研究して見やうといふやうな考へを起して、或は天賦の力であるとか、一種の生氣の作用だとか、種々様々の説を立

て其れから、次第々に研究する人も澤山になり、其の研究も漸々と進んで来て、遂に是れは催眠術といふ名を附け、また何うして斯ういふことが出来るといふ理窟も明らかになつて、今では立派な一つの科學として世に行はるゝに至つたのである、  
斯ういふ次第で催眠術が今日の如く發達全く確實なる科學的基礎の上に立ち、一定の學理に據つて施さるゝ科學的の法術となるまでには、種々の時期を経て來て居るので、其れを細かに説述することは、到底此の小冊子を以て述べ盡くし得らるゝものでもなく、また實際さまで必要なことでもないから、其の發達の時期を左の數節に分ちて、其の概畧を示すことにする、さて其の時期の區別といふは、  
第一期は、催眠術が全く神秘不可思議視されて、妖術とか、魔法とか、奇能とか、唱へられて居た時代で、催眠術が自然的また器機的に行はれて居た頃より、  
歐羅巴に於て催眠術の學説が、始めて一部の學者間に起りかけたまでの時期をい

ふのである。

第二期 は、一千五百三十年の頃、パスルの有名な醫師でテオフラストス、バラツェルヌスが、占星術に基いて、天牀が人間の病氣に影響するといふ説を主張し、此の信念より段々と推察して、嘗て天牀のみが人間の上に影響するのでなく、人間同士に於ても亦た互ひに影響し合ふのであるといふ信念が發達して、是れで以て催眠状態の現象を説明せんと企てた、其れから方々の學者が種々なる方面から催眠状態の研究を爲始め、遂に一千七百七十三年に、メスマルが動物磁氣術(メスメリズム)を創唱するに至るまで、凡そ二百四十余年の間をいふのである。

第三期 は、一千七百七十三年に、獨逸のゾイエンの醫師メスマルが、動物磁氣説を創唱し、其の術を治療上に施し始めてから、一千八百四十二年に、ブレードが催眠術(ヒプノチズム)を發見するに至るまで、凡そ七十年の間を假定するのである。

第四期 は、一千八百四十二年に、英國のマンチエスターの外科醫師ブレードが、動物磁氣の現象に就て、種々の研究を重ねたる結果、催眠術の新學説を發見し、其の影響は漸次歐羅巴全土より延びて他の各國に及び、其のブレーチズムは各方面の學者に盛んに研究され、其の後ち一千八百七十八年に、シャークーが此の催眠術に依つて、ヒステリー患者の治療を始むるに至るまで、凡そ三十六年間を假定するのである。

第五期 は、一千八百七十八年の頃、佛國パリーの神經學者シャークーが、催眠術に依つて、ヒステリー患者の治療を始めてより大に學者の注意を惹き起し、其の勢力が漸次盛んになりて、遂にパリー派若しくはシャークー派とか稱する一派が、醫術界に勢力を振ふに至つた頃より、リーポールが暗示の新説を發見し、一千八百八十四年に、其の研究の結果を世に公にするやうになつた、數年間を假定する。

第六期は、佛蘭西ナンシーの醫師リーポールが、暗示の新説を發見し、其れからナンシーの醫學教授ベルンハイムがリーポールと共に、ナンシーに於て催眠術の實驗的研究を始め、一千八百八十四年に其の研究の結果を世に公にしたので、此の新説に注意を向くる學者が多くなりて、ナンシー派と稱する一派が出来、パリーのシャークー派を壓倒するやうになり、其れからして各國の學者が種々の方面より、眞面目に實驗研究をするやうになり、茲に始めて催眠術の科學的原理は發見せられ、遂に催眠術は全く學術的のものとなりて、而して今日に至りたるまでと假定するものである。

催眠術は、上述の如く種々の研究を経て發達したものであつて、其の名稱は今より六十一年ほど以前に、ブレードに依つて創めて名づけられたのであるが、併し現今世に行はれて居る催眠術は、古代の催眠術とは全く其の趣きを異にして居るは言ふまでもなく、百三十年以前のメスマリズムとも大に違ひ、また六十年前にブレ

ードの發見した催眠術とも餘程違つて居る、即ちリーポールやベルンハイム以後の新説を用ひて居るのである、而して此の新催眠術は、前にも述ぶる如くリーポールとベルンハイムの二人が研究の結果を公にせしよりして、催眠術は科學的基礎の上に立つて居るもので、一定の原則に基いて施さるべき學術的のものであるといふことが、歐羅巴の學界に發表せられたのは、今より僅かに十八九年前のことである、其れから歐羅巴の國々に於て、催眠術の學術的研究が愈々盛んになり、催眠術と稱する一科の學問が發達するやうな譯になつたのである、

## 第二章 醫術と催眠術

世人は醫術といふと確實なる學術的のものと信じ、催眠術といふと不確實なもので學術的のものではなく、魔術や妖術のやうなもので、怪しきもの恐ろしきものやうに想像して居る、其れだから醫者といふと、高尚な業体であつて尊重すべ

く信用すべき人物と思つて敬まつて居るが、催眠術者といへば手品師か何ぞのやうな下品な業昧であつて卑しむべく厭ふべき人間と考へて侮ざるやうになつたのだ、實際此れは太だ間違つた像想なのである、が併し斯ういふ想像の起るのは、元來催眠術といふものは、方々の國々で古代から行はれて居たにも拘はらず、今より僅か二十年ばかり前までは、醫者や魔術師などか、唯だ各自に個々の經驗に據つて、理窟も何も解らずに之れを行つて居たのみで、一定の學理と稱すべきものがなかつたから、世間の人には單だ不思議な法だとか術だとか言つて居たからである、されど世人の崇信して居る醫術とても其の通りで、此の醫術が醫學と稱する精密な學理の上に立つに至つたのも、さはど古くはないので、以前にあつては學理と稱すべきものは殆んどなく、矢張り各自の經驗に基いて、思ひ／＼に治療を施して居たに過ぎないのである、されど醫術は其の名稱が古くから用ひられて居た爲めに、世間の人の耳に慣れて居るから、如何なる方法を用ひても如何

なる手術を施しても、毫も不思議とも奇妙とも思はないのであるが、之れに反して催眠術は古くから行はれて居ながら、早く一定の名稱が附けられなかつた爲めに、其の名稱が世間の人の耳に慣れて居ない、だから其の術が實際道理上から言へば、不思議な事でも奇異な事でもないのに、怪しい魔法だとか怖ろしい妖術だとかいふやうな疑惑が起るのである、併し醫術にしろ催眠術にしろ、病患を治癒せしむる上から言へば同じ理窟なので、醫術に於ては藥劑の力を藉り、催眠術に於ては暗示の作用に依るといふやうに、唯だ其の行り方が違ふのみであつて、其の方法は孰れも學理の研究上より生じたる結果なのであるが、畢竟世人の多數が、催眠術といふ稱呼の新しいのと、其の學理を知らないからして、如上のやうな想像が起り、隨つて之れを疑ひ之れを恐るゝ心が生ずるので、向後世間一般の人に此の學理が解るやうになつて來たならば、醫術の尊重され信仰さるゝと同じく、催眠術も亦た非常の尊重と信仰を受くるに至るべきは、期して俟つことが出來や

うと思ふ、さて此れから催眠術なるものが、古來如何なる方面に多く應用せられたものであるか、また醫術とは何ういふ關係を有つて居るかといふことを大略述べやう。

催眠術が古代から一つの事實として發見されて居たことは前章以來述べた通りであるが、昔の人間は之れを何のやうな場合に行つて居たかといふと、大抵宗教上の醫術上の目的に用ひて居たのである、併しまた魔術師などいふものが、巧みに此の術を利用して、愚民を眩惑せしめて金儲けをやつて居たのも随分あつた、また古代の人間は、思想が單純であつて、知力が一向發達して居なかつたから、宗教家の行ふのも、醫師の行ふのも、魔術師などいふものゝ行ふのも、目的には違へ同じ催眠術を利用したのであるのを、何れも違つたものと思つて居たのである、其れにまた古來方々の國々に於て、催眠術に就ては一種の面白い信念が行はれて居たので、其れは何ういふことかといふに、人間には奇妙な力があつて、其

の力の作用で、甲の人が乙の人の上に種々の影響を及ぼすことが出来るといふ考へである、例へて言へば、茲に一人の優れた人間があつて、其の者が他の人の上に手を添へると、其の力の作用で病氣などが治癒するといふやうな信念なのである、其の證據には、昔の埃及などに於て、祝福といふ事が専ら行はれて居た、元來此の祝福といふ事は、何ういふ譯のものかといふと、甲の人の力の作用で乙の人が幸福を受くるとか、或は病患が癒るとかいふやうな考へが行はれて居たので、耶穌基督が、嬰兒の上に手を置いて祝福したといふ事が聖書に見えて居る、また昔の埃及人や他の東洋の國々などにも、或る優れた人間が他の人の身軀に觸ると病患が治るといふ事が行はれて居た、其れは古の念紀物などに據つて儘かな事實であつたことが分明して居る、また埃及の極古い書物の中に、西曆紀元前千五百年頃の埃及の醫術のことが載せてあるのを見ると、病人の上に手を置くことが、醫術の一方法になつて居たのである、其れから餘程後ちの事で、ピルス及

ビフェスバシヤーなどいふ帝王は、同じ方法で病氣を治したといふことも記録に載つて居る、是れ等の事實は古代に行はれたのみではない、近世に及ぶも、實際に行はれて居たもので、西曆紀元一千五百十五年頃より一千八百三十年頃まで（今より五百年前の頃より百七十年前頃まで）の佛蘭西の代々の帝王（フランシス一世よりチャールルス十世に至る）は、患者の上に手を置いて、其れで病人を癒したことは有名な事實で、國民も亦た一般に其の信念を起して居たのである、また其の身軀に觸れることで病氣が癒るといふ信念を有つて居たのみならず、其の身軀に觸れなくとも、甲の人の力が乙の上に働くことが出来るといふ信念が有つたのである、其うして斯る信念は、單に未開人の迷信であつたかといふに、決して其うではないので、或る種類の病氣は實際癒つたに相違ない、今日でも矢張り其れで癒すことが出来るのである、であるから未開時代醫術の發達せない世には、病氣は大抵斯ういふ事で治療されたるもので、彼の耶蘇基督が病人を澤山癒した

ことが聖書に載せてある、其の中には麻痺の患者を一言に依つて治したり、長い間煩つて居た病人が、基督の着物に觸つたばかりで癒つたものもある、耶蘇の奇跡の中には、随分虚構の事も少くないが、此處に述べたる如きことは、基督でなくても容易に出来ることであるから、基督は全く行つたに相違ないのだ、斯ういふ事實は澤山にあるので、彼のマホメット教徒のうち中には、此の治療力を具へて居るのを名譽とし居たので、殊に其の中でもダーサイシュ（即ち貧者）と稱して、苦行をして居る僧侶の長マセークと稱するものゝ如きは、患者別して小兒の病患を治す爲めに、其の病人に氣息を吹きかけたり、手で觸つたり、甚だしきは足で踏んだりしたのも往々あるのだ。

斯くの如く優れた人間には特別の力があつて、他の人間に其の働きを及ぼすといふ信念は、古代から國の開未開を開かず、何處の國民でも有つて居たのであつて、宗教家などは最も是れを利用して居つたのだ、其の他道士とか仙人とか魔術

師なといふ者が、現在目前に在るものを見わなくしたり、無いものを目前に現はしたり、遠方の出来事を居ながらにして知つたり、人を昏睡させて過去未來の事を示したりすることは、古來方々の國々で廣く行はれて居て、其の國民も亦た以上の人間は、其ういふことの出来る力を有て居るのだとの信念があつたのである。然るに、病人に向つてお前の病氣は癒ると唯だ一言いつたばかりや、また其の身軀に手を觸れたばかりで忽ち病氣が回復するなどは、眞に奇妙とも不思議とも言はねばならぬ、されば近頃の心理学を修めはない人であつて見ると、其のやうな事が實際誰れにでも出来やう筈がない、果して其ういふ事の出来る人があれば、其れは凡人ではない、何か特別の力を有つて居る優れた人間であると思ふのであるが、其ういふ考への起るのは、斯ういふ事の出来る道理を全く知らないからである、心理学上から見れば、身軀に觸つたり、一言の言葉のみで病氣を癒すといふ事は、少しも怪しむに足りないので、今日現に行はれて居る催眠術で

は、實際其ういふ事を爲て居るのである、昔しの人々が唯だ一言の言葉や手を觸れたのみで病人を治したといふのも、全くは催眠術を應用して居たので、また催眠術で用ふる所の暗示の作用に據つたものであるが、併し言葉や手を添へたのみで、何ういふもので病氣が癒るかといふ、其の理窟などを知つ居た譯でもなければ、其れを催眠術の作用などいふことは無論知らう筈がないが、唯だ其のやうな理窟や道理に知らないなりに、自然に器械的に行つて居たのであつて、結局自分で行つて居りながら自分は何うして斯ういふ奇妙な事が出来るのであろうかと、我が身で我が行つて居ることが解らなかつたに相違ないのである、上來述べたる如く催眠術は、古代より種々の方面に利用されて居たのであるが、中にも醫療の上には最も廣く應用せられ、醫術に缺ぐべからざる一方法と見做されて居たのである、されば催眠術を今日の如く發達せしめたのも、多くは醫學者の手に依つて究研せられた結果なので、前章に催眠術發達の時期を假りに定めて



置いて順序に就いて見るも、或は新説を發表したり、または新發見を爲したる者は、孰れも醫學界の人物である、彼の天賦が人間の病氣に影響を及ぼすといふ説を主張せる、即ち占星術の思想に基いて、催眠術の現象を説明しやうと企てたテオフラステス、バラエルは、バスの有名な醫者であつて、其れから動物磁氣説(メスマリズム)を創唱したメスマルは、瀟逸のヴィエンの醫者である、其うして此の人は佛國のバリーで、一種の機械を造り盛んに動物磁氣の療法を行つたのだ、また此の頃は各國の醫術界で熱心に催眠術が研究せられ、特にバリーの醫學會などでは、委員まで設けて其の研究をして居つたのである、また動物磁氣の現象に就て種々の研究を積んだ結果、遂に今日の催眠術(ヒプノチズム)の新學說即ち動物磁氣と稱する現象は、全く主觀的性質のあるといふことを發見したるブリードは何うかといふに、此の人も矢張り英國マンチエスマーの醫師である、其れから此の新學說に基いて、催眠術は益々醫術界に應用せられた、また其の後は

暗示の新説を唱へ出し、ナンシー派と稱する最も學術的なる一派を開き、催眠術の發達上に一大新機軸を作り、遂に科學的暗示療法の開祖として後世に仰がるゝ所のリーポールも同じく醫師で、佛國ナンシーの人であるし、また此のリーポールと共に催眠術の實驗的研究を始め、リーポールと等しくナンシー派の泰斗と稱せられしヘルンハイムも亦た醫師で、ナンシーの醫學教授なのである、其の他催眠術の研究に盡瘁し、催眠術の發達に力を効したのは、十中の八九迄は刀圭社會の人なのである、而して現今催眠術の研究に最も心を傾けて居るのも亦た醫術界の人物か、左なくば醫學に關係する所の心理學者、生理學者などに多いのである、之れを要するに、催眠術は、古代にあつては醫療の一方法として應用せられしのみか、尙ほ近年一科の學術となりし後も、依然或る種類の病患を治療するには、其の効果醫術に劣らず、場合に因つては醫術に於ては、到底完全に治療し難き病息をも容易しく完全に治療することを得るものと認識せらるゝに至つたのである

から、醫術とは何うしても分離し難い關聯を有して居るのである。

### 第三章 各國醫學界に於ける催眠術の研究

催眠術の醫術と離るべからざる關聯を有せることは、前章に於て述べたる通りである、であるから其の發達するに従つて、醫術に影響を及ぼすことが多い、其れで刀圭社界に於ては、益々熱心なる研究家が續出し、愈々精密なる研究に盡瘁して居るのであるが、今左に各國に於ける最近研究の模様、及び一般醫學界の意向を略述し以て讀者の參考に供へることにしやう、  
英國マンチェスターの外科醫ゼームス、ブレードが、催眠術の新説を發見したのは、一千八百四十二年（今より六十一以前）の頃であるが、其の發見が歐羅巴大陸へ始めて知られたのは、一千八百五十九年であつて、其の發見よりは十八年ばかり後なのである、其れは何うして歐羅巴大陸へ輸入されたかといふに、佛蘭

西のポルドーの外科教授をして居たアツアムといふ人が、始めて此の新催眠術を實驗したのであつて、其の種々の實驗した結果を、パリーの有名な外科學及び人類學者であつた、ポール、ブローカといふ人に報告した、ところがブローカは其の實驗の結果を聞いて、パリーの科學協會に於て、大に此の事を論じた、此れがブレードの新發見の方々の國々へ擴がる導火線となつたのである、併しブレードの新説は、漸く方々へ擴がつたのではあるが、未だ容易に勢力を得る譯には行かぬ、其れだから盛んに研究せらるゝまでには至らず、また刀圭社會一般の注意を傾けることも出来なかつた、言はゞブレードの新説は、まだく世の信用を受くるに至らなかつたのである、然るに程經て後ら、佛蘭西ナンシーの醫師リーポールが暗示の新説を發見し、また醫學教授のリーポールが、其の研究を助けて其の結果を世に公にした、其處で始めて刀圭社會に於ても、熱心なる研究者が續々と出で、また他の方面の學者も眞面目に催眠術の研究をなすやうになつたのは、前

章にも略ぼ述べた通りで、其れから佛蘭西に於ては、ナンシー派の研究が益々進み、刀圭社界に於ては特に勢力を得るに至つたのである、また催眠術の研究の盛んになつたのは佛蘭西のみではない、他の諸國に於ても頗る盛んなもので、白耳義、波蘭、丁抹、瑞典、諾威等の歐洲北部の諸國に於ける研究學者は、佛蘭西よりも比較的多少かつたやうに見える、中にもストックホルムの醫師ゾツテルトランドの如きは、催眠術を餘程廣い範圍まで治療上に應用して、大に其の効を奏して居る、また露西亞では、催眠術を行ふことに就ては、政府が非常に干渉して、種々面倒な規則を設けられたにも拘はらず、熱心に研究して居る學者も少くない、其れから希臘、以太利、西班牙などの國々では、リーポールやヘルンハイムよりは餘程以前に、サラマンカの醫師ブリーといふ人があつた、此の人が暗示を用ひて治療を施して居たので、爾來も有名なる醫家や他の學者間にも研究が、盛んに施されて居る、

また獨逸に於ても古來催眠術の研究に従事した人が澤山あつたが、特に近年に至つて、其の研究が大に科學的に發達したのは今より僅か十年ばかり以前からなのであつて、重にチューリツヒの教授の心理、組織、精神病學等を以て有名なる、オーグスト、フォレルの力であると言つても宜い、此の人の力で始めにズウィツルランドで催眠術の研究が起り、其の運動が漸次一般に擴張されたのである、併し此れより以前に於ても、種々の學者が色々の研究を爲し其の實驗の報告を公にした人も少くないが、未だ多くの學者の熱心なる研究心を喚び起すまでには至らなかつた、然るにフォレル教授が始めて暗示の原則を以て、之れを心理的に説明した、其うして催眠術に依つて治療の出来るといふ確實なる科學的基礎を與へたのだ、始めて催眠術治療の原則は、暗示であるといふことを證明せられたから、其れで始めて一般學者特に刀圭社社會の注意を惹き起し、熱心なる研究的運動が生ずるに至つたのであつて、フォレルの與へたる實驗的説明に従つて、之れを治療上に

應用することが益々盛んになつたのである。  
 また埃地利に於ても醫師で催眠術を熱心に研究して居る人が澤山にあるのみならず、其れを實際治療上に應用して、其の結果頗る良好なので、益々其の勢力を擴充しつゝあるのだ、其れから此の催眠術の新説の生れた根本なる英國は何うであるかといふと、

英吉利では、ブレードの新發見以來中々研究も盛んであつたが、中にもロンドン  
 の醫師タツケ―は、催眠術を治療上に應用して多くの効を奏し、またエサンボロ  
 ーの醫師フェルキンは、催眠術に就て甚だ有益な面白い著述をして、其れで催眠  
 術の擴張を計つた、其れに此の人々のみならず他の醫學者も頗る研究を力めた  
 ので、英國全土に段々と勢力を得るやうなつたが、併し催眠術が一般學者の注意  
 を喚び起し、熱心なる研究者を續出せしめ、盛んに治療上に應用するやうになつ  
 たのは、一千八百九十年に、英國醫師總會がビルミングハムに於て開かれた時

に、此の會にて催眠術取調委員を選び、心理學的、生理學的、治療的に、催眠術  
 を研究させるやうにして、而して其の委員等は當時有名なる人々であつて、種々  
 の方面から精密に之れを研究し、一千八百九十二年に至りて其の結果を報告した  
 爲めであつて、其の報告は何ういふことかといふに、催眠術といふものゝ確實な  
 ることを詳認し、また其の種々の徴候を精密に述べて居る、其れのみならず催眠  
 状態が治療の目的に、大よ有効であるといふことを證明し、治療上にこれを用  
 することを熱心に奨励して居るのであつた、其れよりして英國にては刀圭社界は  
 無論、一般の學者に於ても愈々益々盛んに熱心に催眠術を研究し、また應用する  
 ことになつて來たのである。

歐洲に於ける刀圭社界が、催眠術に於ける意嚮は、既に述べたる如き景況である  
 が、其の他は何うであるかといふに、他の諸洲に於ても随分盛んに行はれもし、  
 また熱心に研究して居るのであつて、米國などは歐洲にも劣らぬ有様である、米

國に於ても歐洲と同様に、早くから催眠術の研究は中々盛んであつたので、中にもニューヨークの神經學者ベアードといふ人は、一千八百八十年前後に於て最も熱心に研究し、其の實驗の成績を世間へ發表したのである、併し其の頃は刀圭社會でも一般の學者でも、未だ眞面目に研究に盡悴して居る人は少なかつたのであるが、近年に至つては其の研究が實に盛んなことである、合衆國に於ては、既に方々の大學で此の研究をして居る、また種々の學會でも熱心に研究して居るのである、而して此の研究は北米諸國のみならず、南米にても國々に於て随分熱心に研究して居る學者もあれば、また治療上にも盛んに應用されて居るのである。歐米諸國に於ける催眠術の研究並に應用は、上來述べたる如くであるが、さて我國にては何うであるかといふと、實に微々たるものであつて、眞面目に催眠術を研究して居る人は、皆無であると言つても宜しい、近頃何學會とか何研究會といふ名義の下に、研究もし治療的に應用して居る人達もあることはあるが、是れ等

の人々も其の多くは好奇心から行つて居るやうに想はれる、其れも實際無理ならぬ譯であるのだ、何故かといふに、我が國に此の學說の輸入されたのは、漸く二十年以前であつて、其れも一部の學者間に知られたのみで、其の催眠術の現象を世人に紹介したのは、僅々十數年來のことであつて、而も其れが我が國に於ける種々研究の結果とかいふたれば、少しは世人の注意を惹き起すのであるが、唯だ歐米に於ける研究の摸樣の一部分を報告したに過ぎないのであつた、斯ういふ次第であるから、我が國に於ける催眠術の研究は、甚だ幼稚なものであつて、刀圭社會などにも餘り熱心に研究して居る人は少ない、随つて治療上に應用するほど盛んになつて居ないのであるに、殊に催眠術者と自稱して居る一部の人々の中には、心理學や生理學や病理學などいふ、催眠術を施すに必らず修めて居なくてはならない學科をば、全く知らずに唯だ施術の方法のみを以て満足して居る輩もあるやに想はれる、だから一層世間の人に不安の念を懷かしめ、大に催眠術の發達

を阻害するやうな傾向の見ゆるは、眞に浩歎すべきことであるから、何うの斯ういふ催眠術者の繁殖しないのを希ふと共に、刀圭社界の人々や其の他の科學者達の、奮つて本術の研究に盡悴し、また治療上に應用して其の効果を世人に認識せしめ、以て本術の發達を企圖せられんことを熱望するのである。

#### 第四章 催眠術に對する醫界の反對

何れの時代に於ても、一歩進んだ新しい學說や技術などが、容易に一般に承認されなかつたり、また其の新說や技術が、稍や勢力を得かゝつて來ると、其れに對して種々の反對の起るのは免れないものである、催眠術に於ても亦た同じやうな譯であつて、一時は社界の承認を得られなかつたのであるが、近年著しく世間の注意を惹くやうになつたと共に、また種々の方面から續々と反對の說が起り、また攻撃の鋒を向くるやうになつて來たのである、殊に醫界に於ては、之れに

反對を試みるものが随分澤山ある、元來催眠術を發達せしめたのは、何れの方面の人に多く、また其の實驗研究に盡悴して、種々の新發見を爲し、而して催眠術をして今日の如く、確實なる學術的のものとしたのは、何れの方面の人の力に由るかといふに、前章にも言へる如く、催眠術の研究及び發達の爲めに貢献したるものは、孰れも皆な醫界の人々である、然るに今日一定の學說に基いて施さるゝやうになつて、其の奏効も顯著なるに及びて、同學界の人々が其れに反對し、また其れを攻撃するが如きことは、實に怪訝に堪われない次第であるが、併し其の反對や攻撃の真相を穿つて見ると、蓋し亦た他に理由の存するのである、其れは何ういふ理由かといふに、催眠術は一般醫師の營業上に、大なる關係を持つて居る爲めに、其の反對や攻撃は、大抵自分達の利害から出て居るので、決して學術的としての價值あるものは至つて少ないのである、また他の方面に於ける反對や攻撃は、未だ催眠術の學理を知らずして揄揚する一種の僻見なるに過ぎないの

であるから、是れ等の如きは固より採るに足らないのであるが、多くの反對説の中で、學術上少しく價值あるもの二三を摘んで、左に其の主要を掲げ示さう。

獨逸ヘルリンの精神病學者でメンデルといふ人は、催眠術は神經質の人をば愈々神經質にならしめ、また健全な人をも神經質に陥らしむる恐れがあると言つて、催眠術を攻撃して居る。なる程催眠術を施す方法に由つては、神經を過敏ならしむるから、或は其ういふ弊害も生じないとも限らぬ、オートグスト、フォレル教授やミニツヒの醫師シユレツクノツチング等の説では、メルデルの言ふ如き弊害はブレードの方法即ち或る物體を凝視させて居ることに依つて催眠状態を生ずる方法を用ふるからであつて、全く方法の悪い爲めであると言ふのだ、されば催眠術を行ふには、此の方法を用ひなくても、他に種々の方法があるのだから、他の安全なる方法を選びさへすれば、斯うる弊害の生ずるは恐るゝに及ばないのである、催眠術を施す方法に就ては「簡易速成催眠術」に悉しく説き示しあれば其を参照せられんことを望む。

また或る學者は、催眠術を施されると、其の結果覺醒の時にも、感覺の幻惑を起すやうな、精神病的傾向を生ずる恐れがあると言つて居る、さればアルベルド、モールなどの意見で見ると、其のやうな事實が確かにあるといふ證據は一つもないから、斯ういふ攻撃は全く反對家の想像論であるのだと言つて居る。

また度々催眠術を施された人は、復び催眠状態になりたいといふ、非常に強い欲望を起す害があると言ふ論者もあれば、また催眠術を幾回も施されると、施術者に對して過度の依頼心を起す弊害があると言ふ攻撃者もあるが、併しフォレル教授などの考へでは、施術者が少しく注意を加ふれば、決して其のやうな弊に陥ることは無いと言つて居る。

また或る反對學者は、催眠術を施されると、其の結果ヒステリー性の少しも無つた人間に、ヒステリーやまたはヒステリー性癲癇を起させるやうな場合が生ずる

と言つて居る、なる程被術者のうちには往々其のやうな事もあるやうに見ゆるが、併し催眠状態が殊更にヒステリーや、ヒステリー性癡癡を起すことは無い、催眠術で其れを起す位の人間であるならば、催眠術を施さなくとも、極微かな刺激を意志に受けても忽ち其ういふ結果を現はすのであつて、不意に何か冷たい物が身軀に觸つた位のことでも、必らず其ういふ状態になる人もあるのだから、催眠術の爲めに其ういふ状態を起すのであるとは一概に言へないと、モールなどは言つて居る。

以上述べたる攻撃は、孰れも催眠状態の危険といふ點から反對するのであるが、また催眠状態は全然危険であるといふ譯ではない、唯だ或る一部分だけが危険なといふのである、其れは事實前に擧げたる反對家の言へるより外にも、幾分かの危険は無きにもあらずだ、されば催眠術を施すに就て、必らずしも安全無害であるといふ確言は出来ない、多少の危険は其れに伴ふには相違ない、が併し利害

相伴ふといふことは、單に催眠術のみに限つたものではない、反對論者が本業として居る醫術に於ても、絶体的に安全無害なものとは謂へない、随分危険な場合もあれば、除き能はざる弊害も生ずるのであつて、其の危険を對照したならば、催眠術よりも一層酷だしいことが無いとも言へないのである、何事に由らず世の中の事は、凡て利害相伴ふものであるから、其の利害に就て更に研究を積み、其の利を益々發達せしめ、其の害は成る可く除くやうにまたは防ぐやうにすれば宜いのである、此れから其の催眠術と醫術とは、其の危険の程度に何れ程の相違があるといふことを少しく述べて見やうと思ふ。

催眠術を施された人間は、何ういふ危険に陥るとか、催眠術が行はれると斯ういふ弊害が生ずるやうになるとか言つて、催眠術を攻撃するのが、反對論者の口實であるが、元來施術に對して危険であるとか弊害が生ずるとかいふことを論據とするのは、全然間違つた考へなのである、一層反對論を立るならば、先づ催眠術



を充分に注意して學術的に用ひ、其れで反對論者の論據として居る危険が避け得らるゝか、避け得られぬかといふことを研究して、而して後ち何うしても避け得られない確かな立證が現はれたならば、始めて立派な論據となるのであるが、併し其の危険とか弊害とかいふものがあるにしても、其れを防ぐことが出来たり、また其れが催眠術を施された爲めに得たる利益に比べて遙かに劣るものであつたならば、到底攻撃するの價値がないのである、醫術を以て本業とする人ならば、其の醫術に於ける危険や弊害をば、催眠術の其れ等と比較して、其の結果催眠術に於ける危険や弊害が、多く且つ大なる場合があるを立證することが出来なくては、是れ亦た攻撃論は成り立たないのである。

併し前にも言へる如く、一つは決して安全無害と斷言することは出来ない、其れは何故かといふに、一つは施術者の學識と經驗の深淺に由つて、其の成績に非常の相違を生ずるので、一つは其の方法の選擇に依つて被術者の身心に適不適が

あつて、其の結果に大なる差異を生ずるのである、例へば醫學上に於ける治療法と同じ事で、若し其の療法に暗い醫者が、不注意に其れを行つたならば、必らず危険若しくは害を生しないことは無からうと思ふ、のみならず醫師が用ふる藥劑に於ても、其の中には如何ほど注意して用ふるにしても、猶ほ害を生ずるものが随分無いことはない、事實上慥かに其ういふ場合が往々あるのである、何故かといふに俗諺にも言へる如く、「藥變じて毒となる」の理で、無害な藥と信じて居ても、或る事情の下に其れが有害物と變ずるか知れないのである、また劇藥とか毒藥とかいふものは、初めより危険である、有害物であるといふことが解つて居るから、其れ等は除けものとし、また外科手術に於ける危険なども暫らく措いて言はず、其の他の療法若しくは全く無害と稱へられて居る藥であつて、其れが催眠術に比べて遙かに大きな害を生ずることも往々あるのだ、其の例を挙げやうならば澤山にあるが、併し其れを兎や角う言ふ時には、藥を用ふることを止めんけれ

ばならぬ、また醫師の治療をも乞ふことが出来ぬ、其うであるから醫師の手術が危険だとか、薬を用ふると害を蒙むるかも知れぬとかいふことは、少しも考へるには及ばない、唯だ考へて宜いのは、手術を受け薬劑を用ふとすれば、何ういふ事柄に就て危険が現はるか、また害を及ぼすか、其の危険や害は除き去ることが出来るか何うか、若も其の危険や害が何うしても除き去ることが出来ぬものとするれば、其の爲めに得る所の利益と危害とは、何れが優るかといふことである、其處で假令危害が幾分か生ずるにもせよ、其の爲めに得る所の利益が遙かに優つて居つたならば、手術や薬劑を捨て、了ふことは出来ないのだ、催眠術に於ても矢張り同一の理で、今日の催眠學上の智識より見れば、催眠術を施すと如何なる事柄に依つて危険が起るかといふ事は充分分つて居る、また一定せる無害の方法さへ用ふれば、其の危険を防ぐことも除くことも充分出来るのである、されど催眠術を施されると被術者は、其の爲めに幾分の不快を感じたり、些かの頭痛がし

たり、氣が沈むとか、涙が出るとかいふ事もある、併し此れ等は害といふ程のことには無い、例へば醫師の治療を受けたり薬を飲んだりするにも、痛痒をも感ずれば、辛いとか甘いとか、酔はいとか苦いとかいふ不快は免れられないのであるのだから、斯やうな些細なことは論ずるに足らない、催眠術に依つて得る所の利益に比べて見れば、兎や角ういふ價が無いのである、然れども前にも言へる通り催眠術を施す方法の如何に由つては、必らずしも危険や弊害が生じないといふことは出来ない、反對者の言へる如く神經が過敏になるやうな害を生ずることがある、また多少の危険が伴はぬとも言へないが、其の方法さへ撰めば其ういふ危険や弊害は殆んど全く防ぐことが出来るのである、而して「一番安全な方法といふのは何ういふ行き方かといふと、ナンシー派の方法で、言葉の暗示で催眠させることである、其の方法及び暗示の説明は「簡易速成催眠術」中の催眠方法實例の項と暗示の章に悉しく述べあれば参照せらるべし。

反對者の論據とする所の危険とか弊害とかいふことは、施術者の注意と安全の方法をさへ用ふれば、防ぐことも出来れば除くことも出来る、全休催眠術に於ける重なる危険とか弊害とかいふものは、反對者の言へる如き點ではないので、事實上より言へば、催眠状態になる傾向を増すこと即ち催眠状態になり易くなること、また被術者は覺醒の状態に於て暗示に感應する性質が強くなることとの二点である、此の危険や弊害は實際に於けるのだ、併し前の弊害は重にブレードの方法即ち或る物体を凝視させて催眠状態にする方法を用ふる結果で、此の方法で度々催眠させられた者は、何か暫く物を見詰めて居ると突然催眠状態に陥るやうな有様になる人があるのだ、また後の危険は覺醒前に被術者に暗示を與へてさへ置けば、充分防ぐことが出来る、即ち被術者に向ひ、「何人もお前を催眠させることは出来ぬ、お前は決して催眠状態に陥ることはない、お前は決して他人の暗示を受けてはならぬ、如何なる人がお前を催眠させやうとしても決して催眠されな

い」などいふやうな事を、充分に深く被術者の心に浸み込ませて置きさへすれば、決して暗示に感應する性質が強くなるやうな憂はない、また催眠中暗示を與へることに就て、アルベルト、モールは左の如く言つて注意を加へて居る、

暗示を與ふるには、續いて外感を刺戟することは成るべく避けなくてはならぬ

So 凡て精神を激動させるやうな暗示は成るべく避けなくてはならない。

覺醒前には注意して暗示を停止せなくてはならぬ。

催眠術を施された被術者は、危険に陥るとか弊害を起すとかいふのは、畢竟施術者の注意如何と、方法の撰擇に由るのが多いのであつて、恰かも醫師の療法に於けると同一である、例へば醫師が手術に注意を懈りたる爲め患者を危険に陥らしめ、また處方を誤りて患者を苦ましむる如きことあるに異ならぬのであつて、全然催眠術は被術者を危険に陥らしむるものである、被術者の身心に害を残すものであるといふことは決して無いと謂つても宜しいのである。

之れを要するに醫界に於ける反對は、催眠術が盛んに行はるゝやうになつたならば、自己専有の治療範圍を侵略せられ、醫術の衰微を來すであらうとの、極めて狹隘なる利己主義より出でたるものであつて、また他の方面の攻撃は、催眠術の學理を知らざるに因るものである、而して後者の攻撃は固より齒牙に懸くるに足らざるもの、其は辨駁するの價值なきは無論なれども、醫界の反對者に向つては一言せざるを得ないのである、而してまた其の反省を促がざるを得ないのである。

前々章以來述べたる通り、催眠術は古來醫家治療の一方法として應用せられつゝありしもの、また其の發達に於けるも主として醫界の大家の力に依りしものなるに、今や漸く其の術が一科の學理的に行はるゝに至れるに及びて、其の術に對して非難の聲を高むる如きは、頗る前後矛盾にして怪訝に堪わぬ次第である、殊に其の反對の論據とせる危険とか弊害とかいふ点は、催眠術にのみ存するので

はなく、醫術に於ても同じく存在するものであつて、之れを比較するに於ては、毛を拭いて疵を求むる如きことも無いと言へない、其れ等のことは反對者も充分承知して居らるゝことと思ふ、されば斯る非難攻撃は、單に其の口實なるに過ぎないので、實際は自家本業の範圍を侵されんことを相憂するの餘り、殊には他に未だ適當なる攻撃の材料を見出し得ない爲めに、斯る價值なき點をも質としたのであらう、然れども其は却つて自家の狹量を世に表白するのみで、催眠術其のものは毫も打撃を受くるに至らず、また随つて些かも痛痒を感ずることがないのである、だから反對者は斯る價值なき攻撃を止めにして、他の良策を講ずるが利益であると思ふ、さて其の良策と言ふのは如何なることであるかといふに、古來の大家が爲しつゝありし如く、催眠術を醫家藥籠中のものとして、之れを利用することである、而して此の策なるものは反對者を除く他の醫師は、夙に其の如くに利用して居るのであるのみならず、現今の催眠術大家と稱せらるゝ人々の

多くは醫界の人なのであつて、他の方面のものは割合に少ないのである、また催眠術は近年頗る盛んに行はるゝやうになつたとは言へ、醫術と比べて見れば到底日と同じくして論すべきものではなく、殊に其の治療の範圍の如きも甚だ狭いのである、併し或る種類の病患に就ては、醫術にては治療し難きものをも、容易に治療することも出来るが、之れ等は特別の場合であつて、其れを以て催眠術は醫術に優るといふ譯には行かぬ、また催眠療法法の重なる領分は機能的病患である、組織の損傷が発見されずして、唯だ機能の上に於てのみ現はれて居る病患である、だから其の他の疾病に就ては、其の疼痛を止むる如きことは爲し得るも、之れを全治せしむることは出来ない、何れも醫術の力に依らなければならぬのである、また前にも述ぶる如く、醫家を除きたる他の催眠術家に於ては、催眠學や心理學は先づ充分に講究して居るものとしても、生理學、病理學、組織學などに至つては、概して充分の研究を積んで居る者は無いから、催眠術に依つて治療し得

らるゝ病患だけより治療せしむる力が無いのである、然るに醫家に於ては、治療に關する科學は、催眠學を除くの外は、概して充分の研究講究を積んで居ると見做して宜いのだ、其れであるから催眠術を修むるのも容易である、唯だ催眠學と心理學を講究すれば、其れで何もかも出来るやうになるのである、其處で醫界の反對先生達に反省を促すのは、催眠術を攻撃して自家の估券を下ぐるやうな僻見を水に流して了つて其のやうな攻撃をする手間で、催眠術の學理を攻究し、自家治療の一方に應用せられたならば、自家の利益を増殖するのみならず、世を裨益することも亦た多大なるべく、隨つて醫術も催眠術も共に一層の進歩發達を見るであらうと考へるのである。

### 第五章 催眠術の治療法は暗示の作用なり

催眠術を治療に應用することは、何も近頃始めたことではない、極昔から醫

術外の一種の治療法として行はれて居つたので、現今の如くに醫術の未だ發達しない時代には、催眠術治療が社界を裨益したことは疑ひのない事實である、されど近年までは催眠術の精神作用に關する學理的研究の進歩して居なかつた爲めに、催眠術を施して病氣を治すことの出来る理窟が全く解らなかつたものだから、世間の人は其のやうな事は實際無いもので、唯だ怪しき術を施して人の目を眩まし、無知な人間を迷信させるのであらうといふ考へを懷いて居つた人が多かつたのである、今日でも事實其ういふ考へを懷いて居る人が多いのだ、其れにまた近年醫術が日に月に著しく進歩しつゝある爲めに、治療上の事は凡て醫術に依るの外なしといふ觀念が起り、醫術の他に病患を治療する方法のあるべきものは無いと確信して居るのであるから、催眠術が治療上に特別の力を有つて居ると言つたところで、誰れも容易に信じないのである、然るに近年に及びて催眠術に就いて、精神作用に關する實驗的研究の進むにつれて、各方面の學者が大に其の

注意を傾けるやうになり、隨つて種々の實驗的研究は追々と盛んになり、其の結果催眠學と稱する一科の科學が成り立つやうな事になつたのである、斯く進歩發達するに伴つて、遂に催眠術は一種の治療法として特別の力を持つて居ることも、事實上愈々明白になり、また其の治療が出来る理窟も解つて來たのである、其うしてまた普通の醫術に依つては到底治療することの出来ない病患でも、催眠術に依ると治療する事が出来るといふ特別の力のあることも、段々と發見せられて來たのである、されば催眠術が治療上に應用せらるゝ範圍は追々と廣まつて行くのであつて、今後催眠術の科學的研究が進歩すればする程、醫術以外の治療法は何處まで發達するかは、刮目して見るべき價值があらうと想はれるのである、其處で此れから催眠術の治療法といふのは何ういふ理窟で何ういふ事をするのであるかといふことを大畧述べやう。

催眠術に依つて病患を治療するには、何ういふ方法を用ふるのであるかとい

ふに、凡て被術者が催眠状態になりたる時は、自分の意志の働きは全く消失して  
了ひ、施術者の言ふ通り思ふ通りになるのであるから、此の状態を應用して種々  
の暗示を與へ、其の作用に依つて病患を癒すのである、而して其の被術者を催眠  
状態にする方法及び暗示の説明は、「簡易速成催眠術」第四章及び第十五章に悉し  
く述べ置きたれば、就て参照せられたい。

さて催眠術を施して疾病の治療をなすには、先づ患者に催眠術を施して催眠状態  
にするのである、其れから催眠状態になつて居る患者に向つて、目的の暗示を與  
へるのである、其の暗示を與へるといふのは、何ういふことをなすのであるかと  
いふに、施術者が被術者に向つて、「お前の病氣は最う癒つた」とか、「お前の身軀  
の痛はもう癒つた」とか、「お前の病氣は屹度治る」とか、其の病患に適當する命  
令的の言葉を用ふるのである、其うして其の暗示は必ずしも言葉でなくても宜  
いので、結局言葉でも仕方でも何方でも關はぬ、被術者即ち患者の腦裏に深く印

象とすることが出来れば宜いのである、また此の暗示なるものは催眠状態にある  
者のみに行はるゝのではない、覺醒の場合に於ても施術者の言葉を確信させるこ  
とが出来、また此の信念を深く患者の腦裏に植へ込みさへすれば、或る種類の病  
氣は治癒せらるゝのである、だから此の暗示の治療に及ばず作用に就ては、歐米の  
研究家なども種々の説を立てゝ居るのであるが、中にも暗示説の發見者リーポー  
ルやヘルンハイムの説に據ると、催眠術といふものは暗示に外ならぬのである、  
而して此の暗示なるものは單に催眠状態にある時にのみに行はるゝのではなく  
て、催眠状態になつて居ない場合にも、事實上澤山に行はれて居る、例へば通常  
の水をば患者に與へ、此れは大した名藥であるから、此の藥を飲めばお前の病氣  
は必ず治ると、眞面目に嚴格に言ひ聞すれば、患者は其の通りに確信して飲む、  
其うすると病氣の種類によつては、忽ち治癒することがある、此れが即ち催眠状  
態で無い場合に暗示の作用の行はるゝ例であると、またヘルンハイムなどの説で

は、催眠状態といふものは、唯だ暗示に感應する性質が、覺醒の場合に比べると頗る強くなつて居る一種の精神状態に過ぎないのである、だから催眠状態にある場合のみが、催眠術の行はるゝ範圍なのではなくて、催眠状態でない時でも、前例の如く暗示に感應する場合でありさすれば、矢張り此れも催眠術の行はるゝ範圍と謂つて宜いのである、また催眠術の主力は暗示の作用にあるので、其の催眠状態にあると否らざることに係はらず、暗示さへ行はるれば即ち催眠術が行はれて居ると言つて宜いのであると、斯ういふやうに見ると、催眠術の行はるゝ範圍は大に廣くなつて来る、また其れに従つて催眠術の治療上に於ける價値も大に増して来るのである、而して斯ういふ場合に暗示の行はるゝのは、丁度淺い催眠状態に於けると同じやうなものであるのだ、淺い催眠状態にあつては、唯だ自分の意志が制止せられて、其の結果自由の運動が出来なくなるのみで、記憶といふものは少しも影響を受けない、だから催眠状態に於てあつた事を、覺醒後に至つ

て悉く知つて居る、また其れよりも淺い状態であると覺醒の状態と區別することが出来ない位のものもある、であるからベルンハイムの説の如く、暗示の行はるゝ場合は凡て催眠術の行はるゝ範圍と見做すことが出来るのである、  
 凡て暗示の治療法といふものは、唯だ患者をして其の病氣は忽ち治るといふ事を確信させ、其うして此の信念を患者の腦裏に確乎と浸み込ませへすれば、或る種類の病氣は全快するといふ思想の上に立つて居るものである、即ち患者の精神には眞に病氣は治癒したものと思ふ時は、随つて精神が快くなり延ひて身軀に及ぼし、健康に復するのである、されば此の確實なる印象をば患者の腦裏に植へ附けることが出来るならば、殊更に催眠術を用ひて催眠させるの必要は無いのである、併し此の暗示の治療法が實際効力のあるものだといふ事は、古來實驗家が確かに認めて居る所であつて、昔から方々の國々に於て用ひられて居たものであるが、古代の人間は其の道理を知らないながらに行つて居たのだ、昔し埃及の帝王



は病人の上に手を置いて其れで病氣を治したり、また耶蘇基督が一言に依つて患者を全快せしめたなどの奇跡は澤山にあるが、是れ等は皆古くから人類が自然の經驗に依つて、知らず識らずの間に行つて居た暗示療法なのである、また昔は醫術も甚だ幼稚なものであつて、今日の醫學などいふものは無い、されば醫術は大抵僧侶に依つて行はれて居たのである、また此の時代の醫藥が病氣を治したのは、醫藥の効用といふよりは、寧ろ宗教上の迷信に依つて起る暗示の作用に依つて居たのである、我が國などでも古來社殿寺院等に通夜して、神佛の夢の告げを受るとか、祈禱に依つて病氣の平癒を求めたりするのも、畢竟暗示の作用を助くる方法であつたので、其の神殿佛堂に通夜すると、夢現に病氣の癒る醫藥を授かるとか、其の方法をば教へて貰はうとかして、其の方法に従へば必らず病氣は回復するものと確信して居たのである、其うしてまた大抵の病氣は其れで治つたのであるが、是れ等は全く暗示の作用であることが明かである、其の他お洗米だど

か、御供物だどか、お神水だどか言つて、神佛に供へた物を飲食すると病患が治癒するとか迷信して其れを飲食したり、往々其の名の下に色々の無効無害のものを飲食すると病氣が全快するなどの事實は、今日でも随分俗間に行はれて居るが、孰れも皆暗示の働きを助ける方法なのであつて、彼の俚諺に「鬮の頭も信心から」と言へるのも、矢張り確信に依つて生ずる因果を言つたものである、斯ういふ例は何れの國にても澤山あるので、其れが古代に行はれたばかりではなくて、今日でも猶ほ國々に多少行はれて居ない處はないのである、されば古代は固より近き時代に於ても、醫術以外の奇妙な治療法を行ふて居た人は、僧侶、醫師其の他の方面にも澤山にある、例へば病人の上へに手を置いて、何か言葉の暗示を與へると、其れで忽ち病氣が回復したり、唯だ言葉のみで患者の信念に依つて病氣を治したり、或は病人の身軀を柔かに撫で、病氣を癒したりする人のあつたことは事實である。

斯くの如く古來何れの國何れの時代に於ても、暗示療法は知らず識らずの間に行れて居て、其うしてまた効を奏して居たのであるが、結局如何なる方法であるうとも、其の爲めに病氣が癒りさへすれば、治療法といつて差支なく、また充分なのであるから、強ち治療法は今日の醫術に依らなければならぬといふこともなく、また如何なる方法にもしろ完全に治癒せしむることが出来さへすれば、醫術的治療法に少しも劣る所はないのである、此の事に就てはドクトル、モールの言つて居る事が當を得て居る、モールの言つて居るのは、「古來醫術以外の治療家は、世間から殆んど魔術師か詐偽師かのやうに言はれて居るけれども、虚心平氣に彼等の行つて居る事を觀察したならば、誰れ一人彼等が其の成効の上に於て、當時の醫學的醫者よりも遙かに優つて居たことを疑ふことは無からう」と考へると、また此れ等醫術外の治療法に依つて治療された病人も澤山あつたに相違ない、其うして其の病人の多數は、當時の醫術の力にては治癒せしめられなかつたものであらうと思はれる。

然れども此の暗示を學術的方法に依つて始めて治療法に用ひたのは、極く近年のこと、其の發見者は前にも屢々述べたる如く、佛國ナンシーの醫師リーポールである、催眠術治療上に言葉を以て暗示を興へることは、メスマル派の中にも往々行はれて居たことは事實であるし、またブレードも之れを用ひて居たものに相違ないのだが、其の方法に至つては少しも定まつても居らず、また暗示の實際の價値即ち効力を認めて居つた譯ではないので、此の發見は全くリーポールの功績なのであるが、併し其れを發達せしめて科學界一般に知らしめたのは、ベルンハイムとフォレル教授とである、さればリーポール以前に用ひられた暗示は、單だ其の場合に於て用ひられて居たものであるのであつて、其れが治療の主力となつて居ることゝは、施術者其の人も全く知らなかつたのである、何うして其の施術者が其れを全く知らなかつたことが分るかといふに、古來の施術者が常に暗示を

用ふることを爲なかつたのが確かな證據で、實際暗示の作用には氣が附かず、其の効力を認められなかつたのだ。

元來暗示の成效する爲めには、患者は自分の病氣は必らず癒されるといふことを確信して居なければならぬ、此の信念は施術者が患者の腦裡に深く印象せしめなければならぬのであるが、其れが果して如何なる場合でも甘く印象せしめ得るか、之れは普通の場合即ち覺醒の時には、容易に患者の腦裡に確と印象させることは出来ないで、普通の場合に暗示が功を奏しないといふのは、畢竟施術者が之れを深く患患の腦裏に印象せしめ能はぬからである、其うであるからこれを深く印象せしめやうとするには、或る方法を用ひなければならぬ、而して其れは到底普通の醫師の能く爲し得る所ではない、普通の醫師が如何はと患者の信用を得て居るにしても、催眠術を應用しなひ以上に於ては出来ないのである、催眠術は即ち患者が自分の病氣の治癒を確信して居なくても、暗示の効は儘かに現はれるのである。

るのである。

催眠術は患者が施術者に病氣を治療する力のあることを信じて居なくても、暗示の作用に依つて其の病氣治療の目的を達し得らるゝ方法である、其の患者が如何に知識があり學問がありて、其の暗示の作用を受けない覺悟をして居つても、一たび深い催眠状態にされた以上は、施術者は如何なる暗示を與ふことも出来るので、被術者はまた其の暗示の力に抵抗することは到底出来ないものである、而して催眠状態に於て深く腦裏に印象された觀念は、想像にも及ばぬ程確實なもので、如何なる名僧智識が熱心なる信者の頭に與ふる信仰の觀念にも優りて動かすことの出来ないものであるのだ、其うして此の觀念の働き、即ち暗示の力は多くの場合に於て病患を治癒し得るのであるから、決して醫術の治療に劣るものではなく、醫術以外一種の治療法たるとは言ふまでもないのである、さて此れから催眠術の暗示治療は何ういふ方法であるかといふことに就て述ぶる積りであるが、併

し其れは前に説きたる所に依つて、讀者は略ぼ了解せられたと思ふ、其れで其のやうな重複する煩はしいことは省きて、其の實例を示すが却つて近路であらうと考へる、然るに其の實例として擧ぐべきものは、澤山あつて數限りのない程であるから、著者が實驗せしもの二三を示すことにする。

序に云ふ、被術者を催眠状態にする方法は「簡易速成催眠術」第四章に悉しく説明しあれば、讀者は該書に就て其の方法の詳細を了知せられたし、因て茲には唯だ何々の方法とのみ記して、其の催眠状態にする方法の順序は省略せり、讀者を之れを恕せられんことを。

### 實例第一

予（著者以下之れに做ふ）は、二十二歳の婦人にして久しく胃痛に悩める患者に暗示治療を施した、先づ患者をナンシー派の方法を用ひて催眠状態にして置い

て、「お前の病氣は遠からず全快する、其うして痛みだけでも癒つた」といふ暗示を繰り返して與へて、其れから醒ました、暫くして氣分は何かと問ふたら、胸の痛みは無くなつたやうで、大層氣分も快くなつたと答へた、其の後數日を經て再び來たので、施術後の容態を尋ねたれば「歸宅後は少しも痛みを覺えず、氣分も漸次快いので、もう治りましたやうに思ひますが、今一度治療をして戴いたならば、再び起るまいかと存じて參りました」と答へた、其れで復た施術を爲して、「お前の病氣は確かに全快した」といふ暗示を與へた、此の三回の暗示療法で婦人の胃病は全く癒つて了つたのである。

### 實例第二

次に予は、神経痛を患へて居る四十一歳の婦人を治療した、此の婦人は二年程前より悩んで居たので、既に醫療をも受け種々の藥劑をも服用したのだけれども、

矢張り癒らぬので貴下の御療治を頼みに来たといふことであつた、其處で今度はメスマルの方法で、充分深き催眠状態にして置いて、「お前の痛みは全く治つた」といふ暗示を與へて覺醒させた、然るに被術者は大に痛みは薄らいたと言つて歸つた、其の時に予は斯う言つて置いた、歸宅後に猶ほ痛みが止まなかつたならば、今一度来るやうにと命じて歸らした、處が三日目に復び来て言ふには「歸宅後痛みは漸次に治りて夜分なども快く安眠が出来ます、されど此のまゝでは何うも復た起りはせぬかと案じ過しますので、今一度御療治を受けて置けば大丈夫と考へまして、伺ひましたのです」とのことであつた、其處で予は再び催眠させて「お前の病氣はすっかり癒つた」といふ暗示を數回與へて、催眠より覺醒せしめて歸した、其の後も聞く處に據ると、結果は大に宜しく今は全く健全に復してしまつて居るのである。

### 實例第三

次に予は、十三歳の男子が寢小便で大に困つて居るのを治療した、之れもメスマルの方法で催眠させ「汝は今夜からも寢小便はせぬ、小便がしたくなるど屹度目が醒める」といふ暗示を與へて覺醒せしめ、其れから夜分殊に寢る前などには、成るべく飲食をせぬやうにと命じて歸した、其うすると二三日経てから来て言ふには、彼の夜は寢てから夜中に小便がしたくなつて目が醒めました、其れだけで朝まで事なく済みました、また翌晩は寢しなに小便をして置きましたので朝起きるまで無事でした、お蔭で両親に喧言も言はれず、他の者にも笑はれないやうになりましたので、此のやうな羣しい事はありませぬので御禮に出ましたのですと厚く謝辞を述べて歸つたのだが、之れも好結果を得たのである。

實例第四

其の次に予は、三十歳の男子で喘息の爲めに苦しんで居る人を治療した、此の患者は病が募つて來ると三日位飲食も出來ない程になることが往々あると言つて居つた、其處で余は患者をナンシー派の方法で深い催眠状態にして、其れから患者に向つて、「君の病氣は治つて仕舞つた、寒さに向つても發る氣遣ひは無い」といふ暗示を與へた、すると其の患者は覺醒後に、少しく咳嗽をしたが、胸苦しいことはないと言つた、余は今後四五日の間に若し發るやうな氣味があつたら、今一度治療を行ふから來るやうにと命じて置いた、被術者は其の後一週間ほど過ぎて再び來たので、其の容態を尋ねたれば、其の後寒い日だの夜中温まると、少しづゝ咳嗽は出るけれども、氣息苦るしくなつたり、飲食に差支へるやうなことは無いと言つた、其處で余は念の爲めに再び治療を施して遣つた、其れからは今に

實例第五

少しも發らず、全く治癒したのであると、當人は大層余の治療力を信じて、同病者や其の他種々の患者を紹介して、余の治療を受けしめたものが十數人に及ぶのであるが、大抵は全癒かまたは輕快の効を奏して居る。

或る時余は、十八歳なる少女の僕麻質斯に悩んで居る患者を治療した、此の少女は二年ばかり前より脚部の關節が痛み出し、今では身體中に其の痛みが廻り、殆んど慢性になつたのであつた、余は此の少女をブレードの方法で催眠させ、「お前の痛みは全く治つた、何のやうな運動をしても大丈夫である」といふ暗示を繰り返して與へた、其うして余は覺醒後少女に向ひ種々の運動を命じたるに、何の故障も無く出來たのみならず少しも痛みを覺わぬと言つた、其の後數日を経てから少女は其の母親を伴つて來て、妾はお蔭で其後痛みが止り、また身牀の自由も心

のまゝになり、随つて気分も大層快くなつたが、もう一回治療して置いて貰つたなら、重ねて發ることが無からうと思ひますから、何うかもう一回充分に治療がして戴きたい、其れ母が頭痛性で毎に就藤勝であるから、何うか是れも治りますものなら癒してやつて下さいと頼まれた、其處で余は先づ少女に始めの如く治療法を施し、其れから其の母をばナンシー派の方法で深い催眠状態にして置いて、「お前はもう此れから頭痛がすることは無い、頭痛は全く癒つたのである」といふ暗示を與へて、兩人を歸したのであつたが、兩人とも充分に成効して、少女の僕麻質斯も母親の頭痛も、全快したのであつた。

斯ういふ例は余の實驗だけでも數百人に上るが、其中全く治癒したのは殆んど五分、輕快したのが二分、何うしても根治されぬのが三分ほどである、が併し此の比例は大凡であつて、決して確實と斷言は出来ない、何故なれば患者が何うしても催眠状態になられないのがある、また不完全な状態であるのもある、其のまた

患者の催眠術に感ずるの多少が、治療の結果に成功と否とを生ずるのであるから、其れで治不治の比例に懸隔が現はれるのが一定しないのである、而のみならず假令患者のすべてが、完全なる催眠状態になるものとしても、病患の種類に依つて、暗示の治療の効力が現はれないのがある、即ち暗示の作用では到底治癒せしむることの出来ない病患があるのだ、其れで治療者は能く其の病患の種類より、患者の神心及び身軀の健否などを診別し、而して催眠術を施し暗示の療法を爲さなくては、勞して効を奏することが出来ない場合が澤山にある、されど催眠状態にされる患者であつたならば、如何なる疾患であるとも全快せしむることは出来ないにしろ、多少輕快せしむること例へば疼痛を止むる如きは、必らず爲し得るのである、殊に機能的の疾患ならば全然治癒せしむることが出来るのである。

また前既に述ぶる如く、暗示の療法といふものは、強ち催眠術に依らなければ成

効しないといふ譯ではない、唯だ患者を催眠させて暗示を與ふると、其の暗示が感  
 應し易ひ、だから結果の成績が完全に奏効するし、催眠状態でない患者に暗示を  
 與へて奏效するのは大に困難である、即ち暗示に感應し難いから、其の効力も亦  
 た随つて少くない完全でないといふばかりで、畢竟は患者が工合よく暗示に感應  
 さへすれば、必らずしも催眠させなくても宜いのである、されどリーポールやベ  
 ルンハイムは、如何なる場合でも暗示の感應する以上は催眠状態の範圍に在るの  
 だと言つて居るが、其の議論は一先づ預り置いて、普通の場合即ち殊更に催眠方  
 法を施さないで、暗示だけを與へただけで、治療の効を奏する場合のある古來の  
 實例及び著者の實驗例を左に示すことにする。  
 ドクトル、バックレーといふ醫師は、或る時一人の女子が、手が腫れて拳を握つ  
 たなりで痛み何うしても其れを開けることが出来なかつた、バックレーは其の思  
 者に對し、編物用の二本の針を、患者の指の端より二寸計り距りたる拳の上部に

いたし、其れから患者に唯だ一心に此の針の尖端を見詰めて居れと命じて置いた、  
 其うすると暫くして不思議にも指は軟らかになり少しの痛みもなしに拳を開ける  
 ことが出来るやうになつたのである、此れは針が其を治療する力があつたのでは  
 ない、矢張りバックレーの暗示の作用に依るのである。  
 また獨逸ザクセンの或る都會に住んで居た醫師は、多くの患者を治療するのに、  
 時間を定めて其の時間中は必らず膝に就て居ることを命じ、また其れと同時に  
 「お前さんは大に發汗するから、其の發汗に依つて必らずお前さんの病氣は癒る」  
 といふことを言い聞かせて置くのであつた、ところが不思議にも此の暗示に依つ  
 て、大抵の患者は治癒し、頗ぶる好結果を得たといふことである。  
 斯ういう例は幾許もあるので、彼の月經が暗示に依つて起されもし、また止めら  
 れもする、此れは其の婦人の性質に由つては實際に出来るので、決して疑ひのな  
 い所である、或る地方では、若い婦人が舞踏などに出る爲めに、月經を數日間遅



らせたいと思ふと、小指の周圍に何か物を巻き付けて置く、其うすると必らず月經が遅れるのだと言つて信じて居る、其うして實際其の通りに月經が延びるのである、此の方法は一般に効を奏して居るが、併し其の信念が無くなると同時に、其の効果をも奏せないやうになるといふことである、此れも全く暗示の結果であつて、小指に物を巻きつけた其の物には何も關係もないものであつて、畢竟暗示の信念の作用なのである、次に著者が實驗に於ける事實を述べて讀者の参考に供へやう。

(1) 余(著者自らをいふ以下同じ)は、或る時五十一歳になれる男子の腦病に悩める患者の治療を爲さんとて、催眠術を施せしが、如何にしても催眠せず、其處で余は此の患者は催眠術に感應せざる者と認定し、治療を謝絶せんかと思ひしが、試みに催眠術以外の方法を實驗しやうとの野心を起し、先づ患者を閉目せしめ置きて、余は自分の兩方の手掌を合せて摩擦し、其れを被術者の患部に當て、

斯くの如くすること數回にして、「卿の病氣は確かに治つた」といふ暗示を與へた、其うすると不思議にも患者は快氣に歸つた、余は到底治癒する譯には行かないと案じて居たのに、其の翌々日來たので、早速其の容子を尋ねると、「貴下に治療を願つてから、腦の痛みがすっかり治りました」と答へ、其れで今日は一寸御禮に参りましたのです、と言つて大層機嫌よくさまくの話しをして歸つた、ところで余は自分ながら暗示の作用の効能に驚き、其れから後は、催眠状態になり難い患者には、此の方法を應用して居るのであるが、機能的の病氣は大抵成績が宜しく、また他の病氣でも随分全快した者もあり、全快せざるも輕快の兆候は現はれるのである、次にまた、

(2) 腹部に異狀ありて時々痛みを發し、久しく醫藥を用ふるも輕快せず、氣分の快き日無ければ、治療を受けたとて來れる、年齢廿四歳の婦人ありしが、身心の餘程衰弱し居るを以て、到底催眠術の感應は完全なるまじと思ひ、前記の施術

を爲すと同時に、「歸宅後は何時より必ず就寢し居るべし、何時に至れば便通を催すべし、其れより腹部は軟らかになり、気分も快くなりて全快する」といふ暗示を與へた、其うすると其の翌日復た來りて、「昨日治療を受けて歸宅後、お指圖の通り就寢して居りますと、貴下の仰せられたに違はず、便通がありました、すると腹部の工合が大層よくなりましたして、今朝何時もなく食事も甘美で、気分も晴々いたしました」と言つて謝辞を述べて歸つたが、其の後途中などで逢ふ時にも、彼の中から腹部の工合も気分も痲張と癒り、身軀も日に増し健全になりましたと言つて、今に再發の容子もないやうである。

(3) また余の乳母の娘で三十一歳になつたのが、脚氣を患らひ手足が麻痺して困つて居るから治療して呉れと言つて來た、是れも前例の方法で全快したのである、

(4) また余の友人の娘で十五歳になるのが、ヒステリー性癲癇で、半年ばかり病

んで居るのがあつた、身軀は日に々々衰弱を増すばかりで一向醫藥の効が無いから兩親は大層心配して、予に言ふには、ヒステリー病は催眠術では癒らぬといふことを聞て居るので、君が催眠術療法を行られるのを知つて居るけれども、今まで娘の治療を乞は無かつたのであるが、其れは實際のところであるか何うかは我々には分らぬから、君の意見は何うであるか、若し治療が出来るものならば、一つ救つてやつて呉れ、そのとであつた、其處で予は豫て其の娘の衰弱して居ることを知つて居つたから、心の中ではもつと早く頼めば、催眠術で直ぐに治して遣るのに、今になつて爲やうがあるものかと思つたけれども、其のやうな事を言つたならば、無情な男だと怒りもし、また何うしても治療の出來ぬものかと落膽もし歎きもするであらうと思ふと、何んとかして治して遣りたい、彼等も能く／＼なればこそ、ヒステリー症の治療は、催眠術では完全の結果は得られないと知りながら、予に絶つて來たのである、是れは一番是非回復させなければならぬと思案を

極め、何氣もなくヒステリー症は普通の催眠術では治療が困難なのであつて、其れに随分衰弱して居るので一層困難ではあるが、予は催眠術を用ひなくても、他に治療の方法があるから、其う心配しなくても宜い、兎に角余に任せて置き給へと、第一友人の夫婦に力をつけ置き、其れから其の娘を前例の方法を施すと同時に、「娘は何時になつたならば、忘れぬやうに熱い湯を茶碗に一坏飲んで、目を閉ぎ氣を沈めて寝ると、何時から發熱する、其れで病氣は必らず癒る」といふ命令的暗示を與へた、其うして自分は後の容態を見やうと、其の夜は友人の宅に一泊した、すると余の命令時間に熱き湯を飲んで患者は寢に就た、ところが暗示の時刻から非常に熱が發つて來たが、夜の明け方には熱も醒め快よく眠つて居たのである、余は固より兩親も結果の成績を案じて居つたから、朝早く起きて患者の容態を診察して、其の氣分を尋ねると今朝は大層快よいから、一先づ起きて庭を運動すると言つたので言ふ通りにさせた、其れから余及び兩親と共に食事をもし、

何時になく快活に談笑したので、余も意外の好結果を得たので實に得意満々であつたし、友人夫婦も娘も非常に悦んだのであるが、余はまた餘り良成績なので若しや再發しはせぬかと、余密かに心配して居つたのであるが、其の後の経過は大に宜しく、今日では身軀の健康も全く回復して了つた。

斯ういう例は澤山あるが、此の方法で以て患者のすべてが治癒するかといふと、決して其ういふ甘い都合には行かないので、余は催眠術を施しても感應しない患者にのみ應用して居るのであるが、併し余が此の療法を試みた所では大略患者の半数は成功したのである、されば此の方法も場合に依つては醫藥に優る効力を現はすのである。

之れを要するに催眠術の治療法といふのは、事實上暗示の作用に外ならぬのである、だから上來述べたる如く、假令催眠状態でない患者にても、言葉若しくは他の方法を用ひて、暗示を腦裏に印象せしむることが出來さへすれば、大抵の病患

は治癒せらるゝのである、其處で次章に於ては、如何なる種類の病症が暗示の作  
用で治療し得るか、また如何なる病患が治療し得られぬかといふことに就て述べ  
やうと思ふ。

### 第六章 催眠術は如何なる病患を治癒し

得るや

催眠術の科學的研究を始めたのは、未だ其の日が甚だ浅いのであるから、治療  
上に應用するに如何なる種類の病患に對して効力があるといふ事は、確かに精密  
に定まつて居ない、其れは今實驗研究中なのであるが、併し今日まで多くの學者  
が患者に就て實驗した所に據ると、全く定まつて居ない譯ではない、また中には  
確と定まつては居ないが、大抵催眠術で治療が出来るといふ事の明らかになつて  
居るのも少くない、其れに甲の實驗家が到底治療の見込がないと言つて居る病患

でも、乙の研究者は全癒せしめ得たと言つて其の實驗報告をするやうなものもあ  
つて、今や其の實驗は各國にて行はれつゝあるのみならず、日一日と明らかに判か  
つて來る有様であるから、將來段々と實驗を重ね行つたならば、決して判然しな  
い事はなからうと思ふ、然るに催眠術治療法に反對する學者は、其れを小楯に取  
つて彼れ是れと論するのであるが、之れは甚だ其の意を得ない談であつて、自家  
撞着の論と言ふべきものである、何故ならば今日の醫術に於ても、此の藥は斯う  
いふ病氣に効があるといふ事は、始めから知れて居たものではない、永い間種々  
の實驗を経た上で漸く定まつたのである、また今日の醫術に於ても、斯く々々の  
徴候を現はして居る病症に對しては、此の治療法を用ゆるものであるといふ事の  
確定して居るものは比較的少ない、實際其の試験中のものが随分有るところか、  
其れか頗ぶる多いと謂つても宜いのである、其うであるから催眠術で治療の出來  
る病患は、此れ々々の種類のものであると判然しないのは當然の事である、され

と今日まで多くの學者が實驗した所で、催眠術暗示療法に依つて、治療の出來得る病患の種類の大畧を左に擧げて見やう。

催眠術療法の古來醫學界及び其の他の方面にまでも應用せられて居たことは、上來屢々述べた通りであるが、其の療法は如何なる種類の病患に効力があるかといふことに就て、始めて公然と發表せられたのは、一千八百九十二年に、英國醫師總會の撰定せる催眠術取調委員の報告なのである、其の報告に於ては、催眠術といふものゝ確實なることを承認し、また其の種々の徴候を精細に記述して居る、而のみならず、催眠状態が治療の目的に大に有効であるといふことを證明し、治療上に之れを應用することを熱心に奨励して居る、其のうちでも不眠症を治療すること、疼痛を除くこと、及び種々の官能的病患を治療することに對しては特に効があると言つて居る、また酒狂即ち非常に酒を飲みたがる病的欲求を治すには特に効果のあることを證明して、酒狂の治療に催眠術を應用することを特別に

奨励して居るのであつた。

其の後も多くの學者が幾多の實驗を爲し、種々の研究を積んで催眠術で治療の出來ると認めて居る疾患は、大抵左の如きものである。

第一種は、解剖的原因の無き諸種の疼痛、即ち頭痛、腹痛、胃痛、卵巢痛、尿道炎、脊髄痛、胸痛、神経痛、癱瘓質斯痛、癲癇痛等の類。

第二種は、癩痢、脚氣、便秘、喘息、遺精、麻痺症、不眠症、月經不順、ヒステリー性憂鬱、ヒステリー性嘔吐、驚はるゝ夢、自發的睡遊、昏睡病、妊娠中の嘔吐、感冒、感冒性咳嗽、食慾の缺乏、酒狂、アルコール中毒、ニコチン中毒、鐵毒、モルフィチン中等毒である。

猶ほ此の他に催眠術で治療する徴症の中で擧ぐべきものは、吃り、慢性便秘、瘧疾、小便、神経的に起る皮膚つ痒感、神経性の呼吸困難、神経性眼球壓痛、生後に得たる色慾顛倒、陰の痙攣的緊縮、陰莖の萎縮、淫亂等であるが、また催眠術で癒

すとの出来るか何うか、未だ判然しない病患及び到底治療し難いと認められて居るものは、大抵左の諸症である、

神経衰弱は、催眠療法で治療することが出来るか、何うかといふに、此れに就ては諸大家が種々の實驗研究をして居るのであるが、未だ何れも好結果を得て居ない、併し神経性病患のうちでは、前にも言へる通り儘かに治るものもあるのだ。

次はヒステリーである、ヒステリーと名づけて居る病患のうちでも、種々の性質のものが混じつて居るから一概には言へないが、先づ大抵は催眠療法では容易に治し得ないのである、併しヒステリー性のうちでも治療の出来るものも無いではない、殊に其の徴候を矯正するだけは確かに出来る、然るに前章にも言つた通り、脳の不健全なものは催眠し難いのである、其れが甚だしければ一層困難であるのだ、其處でヒステリー患者は、大概脳が不健全なので、催眠術を施すに頗る困難なのであつて、此れが先づ治療の出来ない一原因であるから、追々實驗研究が

積んで来たならば、此れ等も容易に催眠させられるやうにならう、其うなると治療法も亦た随て進歩するであらう、

其の次は、精神病者であつて、此れも前のヒステリーと同一の理窟で、催眠療法で治すことは甚だ困難である、其のうち輕症のものは随分治らないことは無いが、概して言へば催眠療法では好結果を得られないのである、殊に精神病のうちには有機的變化が原因になつて居るのである、此れ等は到底催眠療法及び無い疾患なのである、が併し有機的變化が原因となつて居る疾患でも、全く治らないといふ譯では無い、往々癒つた場合もあるのだ、殊に其の疼痛の苦を除く事に於ては効果を表はして居る事が澤山にある、腫物の痛み、痲痺などの苦を去る事などは出来るのである、また外科手術を施すに、患者も疼痛無感にすることの出来る場合もあるし、其れが全く無感にならなくとも、其の疼痛を軽くすることは儘かに出来るのであるから、古來外科手術に催眠療法を應用して居る醫師は澤山に

あるのだ、其の他有機(有機)的疾患即ち解剖的原因のある疾患、組織の損傷が発見されて居るものは、到底催眠療法には適しないのだが、唯だ催眠療法(催眠療法)の暗示作用(暗示作用)で其の疼痛(疼痛)を止むるだけは出来るのである、或る實驗家(実験家)は肺結核(肺結核)を催眠療法(催眠療法)で治癒(治癒)させたと言つて居るが、之れは實際治癒(實際治癒)し得らるべき理(理)がないのだ、然るに其の實驗(実験)家のいふには、被術者(被術者)は其の後身(後身)の健康(健康)殆んど常人(常人)と異なることなく、日々の業務(業務)を執るに差支(差支)へ無いのであると、思ふに之れは其の患者(患者)は暗示(暗示)の作用(作用)に依つて苦痛(苦痛)を除き去(除き去)られ、また自己(自己)の肺結核(肺結核)なることを忘れさせられた爲めに、自(自)らと身心(身心)の健康(健康)を回復(回復)し元氣(元氣)を生ずるやうになつたのであらうが、併し果して其の結核(結核)微菌(微菌)を撲滅(撲滅)することが出来るか何うかは大なる疑問(疑問)である、されど其の繁殖(繁殖)は儘かに防止(防止)することが出来るであらうと考へられるから、此の實驗家(実験家)の説(説)の如くに或る輕快(輕快)せしむるとは出来るであらう、著者(著者)の實驗上(實驗上)にも尿道(尿道)カタル(カタル)即ち癩病(癩病)の苦痛(苦痛)を止めたり、腫物(腫物)潰瘍(潰瘍)の疼痛(疼痛)を去る、其の爲めに其の毒菌(毒菌)の繁殖(繁殖)が防

止せられたかと思ふことも往々あるから、斯ういふ病患(病患)にも幾分(幾分)の效力(效力)を有するものと謂つても宜いのである。之れを要するに、催眠療法(催眠療法)に治癒(治癒)せしめ得らるゝ病患(病患)の重なるものは機能的(機能的)即ち神經系統(神経系統)に屬する病患(病患)である、組織(組織)の損傷(損傷)が発見(発見)されずして、唯だ機能(機能)の上(上)に於てのみ現はれて居る病患(病患)である、例へば神經系(神経系)の種々な病患(病患)の如きは、機能上(機能上)に於ては其の徵候(徴候)が著しく現はれて居るが、組織(組織)の損傷(損傷)即ち解剖上(解剖上)の傷害(傷害)は未だ発見(発見)されないのである、斯ういふ種類の病患(病患)はすべて催眠療法(催眠療法)の範圍内(範囲内)に屬するものであつて、其の他の病患(病患)は未だ判然(判然)しないものと謂つて置くが穩當(穩當)であらうと思はれるのである。

## 第七章 催眠狀態の生理的徵候

催眠術(催眠術)治療(治療)といふは、催眠術(催眠術)を施(ほ)して患者(患者)を催眠狀態(催眠状態)にし、其れから暗示(暗示)の作

用に依つて病患を治すのである。其處で催眠状態になると何ういふ徴候が現はれるかといふことを豫め知悉して置くことが、治療上頗る必要な條件である。而して其の徴候には生理的のものと心理的のものがある、先づ本章に於ては生理的徴候の重なるものを擧げ、心理的徴候は後章に述べる積りであるが、併し本章で述ぶる生理的徴候と稱するものも、嚴密な意味で言へば、すべて皆心理的徴候なのであるが、便宜の爲めに之を區別して、神経の末端及び筋肉に關するものを生理的徴候と假定し、大脳中樞の作用に止まるもののみを心理的徴候と假定したのであるから、讀者は幸に之を諒とせられんことを望むのである。さて生理的徴候を説くに就ては、暗示の感應から述べなければならぬ、其處で暗示といふは何ういふことであるかといふに、本書の初めにも言つて置いた通り、悉しいことは「簡易速成催眠術」の第十三章に説き示してあるから、該書に就て了知せられたい、併し一口に言へば暗示といふものは、被術者に對する施術者の

凡て命令なのである、而して此の暗示といふものは強ち催眠状態にある人間のみが感應するのでは無い、普通の場合にあつても人間は此の性質を具へて居るのであるが、催眠状態になると其の性質が非常に強くなつて來るのである、其うしてまた此れが催眠状態に於ける最も著しき徴候なのだ、然らば其の暗示に感應するといふのは如何なる事であるかといふに、實際有るものでも無いと言はるれば、全くないと思つたり、また現在無いものでも有ると言はるゝと眞實に有るやうに思ふやうになる、といふやうな事なのである、其處で此れは何ういふ理窟で其のやうな妙な工合になるかといふと、凡て人間には觀念といふものがある、また其の觀念には一種の働きがあつて、其の働きは心の内に現はるゝこともあれば、また身体の表面に現はるゝこともある、例へば鼠といふ觀念が猫の觀念を喚び起し、猫の觀念が犬の觀念を喚び起すのである、斯ういふやうに人間の頭の内に何か一つの觀念が起ると、また忽ち他の觀念を喚び起すのであるが、此れは聯



伴の法則といふので、また一部の心理學者は暗示の法則と名づけて居るのである、而して此の觀念はまた種々の感情だの、欲望だの、感覺なども喚び起す働きを有つて居るもので、例へば親兄弟に別れる觀念が起ると忽ち悲哀の情を喚び起し、或は自分の望んで居る物のことを想ひ出すと忽ち其れを得たいといふ欲情を惹き起し、また風の觀念が起ると身軀が痒くなる感覺が起きて来るやうな工合である、斯くの如き觀念は孰れも皆心の内に働く所の作用であるが、觀念なるものは此の外にも作用を及ぼすことがある、其れは何ういふ所に及ぼすかといふと外部即ち身体に其の働きを及ぼす場合があるのだ、例へば何か其處に物が有ると思ふと、眼筋の運動を起し、自然に其の方角を見るやうになる、また身体に何か附て居ると思ふと、自然に手が運動して其處を探るやうになるのである。斯くの如く觀念には一種の作用があるので、其の作用が心の内に働きて他の種々の觀念、感情、欲望、感覺等を喚び起すこともあれば、または外部に働きて身体

の運動を惹き起す場合もある、其うして其の働きが大抵の場合には、内外兩方に及ぼすのである、また觀念の身体に働きを及ぼすことに就ては、如何に其れを防がうとしても防くことが出来ないで、其の通りになつてしまふ場合がある、例へば、何か心の中に羞かしいと思ふことがあるのを隠して居る人に向ひ「君の顔は大層赤くなつて来た」と言ふと、大概の人は實際其の顔が赤くなるものだ、此れは其の人の心に自分の顔は赤くなつて居るのだといふ確信即ち觀念が起つて、其の觀念が忽ち血管に働きを及ぼすのであつて、斯ういふ場合に於ては、自分が何のやうに其れを隠くそうと思つても少しも其の効がないのである、斯ういふ場合は外にも澤山あるが、畢竟は唯だ其の人の心に一つの確信即ち自己の身体に或る變化が生ずるといふ確信を起させるに依つて、實際に其の結果を生ずる方法であつて、斯ういふ性質の方法を指して特に暗示と稱するのである。其處で人間が催眠状態になると、此の傾向が非常に強くなるのであつて、ナンシ

一派の催眠方法は、此れと同一の理に依つて居るのである、即ち被術者の心に自分  
 が催眠状態にされるといふ確信を起させ、其の觀念の働きに由つて催眠状態に  
 ならせるのである、一口に言へば觀念が人の身体上に種々の變化を生ずること  
 は、普通の場合にも少なくないのだが、催眠状態は其れを特に強くならしむるの  
 である。

また此の暗示に對して實際其の通りになる傾向を稱して、暗示さるべき性質或は  
 暗示に對する感應性といふのである、而して催眠状態にある者は、此の性質即ち  
 感應性が非常に強くなるので、何か暗示を與へると全く其の通りになる、其うで  
 あるから催眠状態にある時は、暗示に依つて其の人の上に種々の變化を與へるこ  
 とが出来るのである、其れに此の暗示の効力は單に催眠状態にある間のみに止ま  
 るものではなく、催眠状態に在る時に與へてさへ置けば、覺醒後にも久しく其の  
 効力が繼續するところから是れを名づけて殘續暗示と稱するのである、而して此

の殘續暗示の方法を用ふれば、覺醒後に其の人の上に種々の變化を生せしむるこ  
 とが出来るのであるから、催眠術を治療上や其の他の實用上の目的に應用する場  
 合には、此の殘續暗示が極めて必要なのである。

要するに人間は暗示に感應する性質を具へて居て、覺醒の時にも多少感應するの  
 であるが、催眠状態に在る時は此の感應性が非常に強くなり、また其の暗示の與  
 へやうに依つて覺醒後にも殘續して種々の効力を現はすのである。

上來述べたる所に依つて暗示の作用といふものが、如何なるものかといふことは  
 了解されたであらうと思ふから、本章及後章には人間を催眠状態にして置いて、  
 其れに暗示を與へると、身体及び精神に種々なる徵候が表はれる其の徵候の重も  
 なるものを説き明す積りで有るが、先づ身体上の徵候より説き初めて其れから順  
 次精神の徵候に及ぼすことにする。

身体上の徵候にも色々有るが、中にも目に着易いのは隨意筋の上に表示される現象

で有る、其れは何んな風になるものかといふに、施術の方法と被術者の性質とに由つて大に相違するので有るが、大抵は恰かも睡つて居るやうになつて、全く運動をすることが出来ない、稀れに少しの運動をしても、其れは極めて不活潑なるものに過ぎない、併し場合に依つて施術者が暗示を以て運動を禁ずるまでは、自由運動の出来るものも有る、而して其の運動の出来なくなつて居るものでも、施術者が一たび暗示を與へると、忽ちまた運動が出来るやうになる、されど其の運動は施術者の暗示通りするのである、其れからまた此れまで出来て居た運動も矢張り施術者の暗示で全く出来なくなる、畢竟隨意筋の作用が暗示の爲めに如何やうにも左右せられて了ふのである、だから其の運動をするのも運動が出来ないのも、凡て施術者の意の如くなるので、全く被術者の意志なしに、或は其の意志に反して運動をさせることが出来るのである、斯かる現象の表はるゝのは前に述べたる通り、施術者に暗示された運動の觀念が被術者の脳裏に起り、其れが直

に筋肉を刺戟するからである、また催眠状態に於て特に現はるゝ他の徴候は、摸擬作用即ち真似をすることである、此の現象に就ては催眠術家のドナトといふ人が特に大に研究したので、一に之れをドナチズムスと稱して居る、またデコーチといふ人は之れをフラスチーシオン(捕心術)と稱して居るのであるが、此の現象の表はるゝのは、被術者をして施術者の眼を見詰めて居る方法に起るので、先づ施術者と被術者とが互に眼を見詰めて居ると、暫時にして終に被術者の心は全く施術者に支配されてしまつて、被術者は何んでも凡て施術者の爲す通りに真似るやうになるのだ、例へば施術者が手を組めば被術者も手を組み、施術者が首を振れば被術者も亦た首を振るといふやうに、施術者のすることは何んな事でも一々其の真似をするやうになるので、被術者は恰かも操り人形と等しきものになつて了うのである、而して此の徴候を生ずるのは強ち目を見詰めて居る方法に據らなくとも宜い

ので、被術者をして施術者の指を見詰めさせて置いて、此の徴候は現はれるのである、此の場合には被術者はすべて施術者の指の運動に依つて真似るのである、また以上の方法でなき他の方法にて催眠させた被術者の眼を開けさせて、其れから施術者の眼を見詰めさせても同じ現象を生ずることが出来るのである、併し何れにしても被術者の眼を開けて置いて、絶えず施術者の眼なり指なりを見詰めさせて置かなければならぬ、若し被術者の視線が他へ向つてしまふと、此の作用は忽ち止んでしまふのである、

其處で斯ういふ作用の起る理窟は何ういふ譯であるかといふに、此れも亦た一種の暗示なのである、元來暗示といふものは、言葉にのみ依るのでなく、如何なる方法を以てしても、被術者に其の意味を理解させて、施術者の思ふて居る通りの観念を起させることが出来れば宜いのである、而して此の模擬作用の場合に於ては、言葉でなく實際の運動を示して其れに對する観念を起させるのであつて、言

葉の暗示よりは一層直接の方法であるから、被術者は言葉を以て暗示せらるゝよりも却つて此の方が理解し易いので、施術者の運動を絶えず見詰めて居るからして、其の運動の觀念が一々被術者の腦裏に起り、其の觀念が直に筋肉を刺戟して、其の通りの運動をすることになるのである、

また催眠状態の一徴候として身軀が不隨になるのだ、此れは言葉を以て暗示を與へる必要はないので、唯だ施術者がするまゝになるので、被術者は恰かも生た人間のやうではなく、鉛か錫かで造らへた人形か何かのやうに、手でも脚でも何處も被處も、少しくも被術者の意の如くならず、施術者の思ふまゝの状態になるのである、言葉や形容の暗示で被術者を暗示通りに動かすことは、前に述べたる如き理窟であるが、此の不隨状態は其れ等とは全く違つて居る、其處で此の不隨状態の起る理窟は何ういふものであるかといふに、凡て人間には筋肉感と稱する、一種の感覺があつて、此の感覺が筋肉の状態を意識せしむるのである、一説には

此の感覺を關節感とも稱して居るのであるが、兎に角其の筋肉や關節の状態を意識せしむる一種の感覺があるので、此の感覺が即ち催眠状態にある者に暗示を與へる一つの通路となるのである、例へば施術者が催眠状態にある者の脚を屈めさせるとすれば、其の時に前に言へる一種の感覺に依て被術者の腦裡に一の觀念即ち「脚が屈まつて居る」といふ觀念が起るのであつて、彼の言葉を以て命令する暗示の場合と少しも異ならないのである、されば不隨状態といふものは、一見した所では一般の暗示の場合と大に異なつて居るやうに見ゆれど、其の道理に至つては他の暗示に於ける働きと些かも異なつては居ないのである、であるから筋肉若くは關節の感覺が暗示の傳達者となりて、此の状態を現はすのも、矢張り被術者に其の觀念を起させるのが眼目なので、其の方法の如きは何も施術者が手を下してするには及ばない、例へば言葉の暗示で脚を屈めさせて置き、其うして「お前の脚は伸びないのだ」と言へば、手を以て屈めたのと同じことに不隨状態にな

つて、被術者は何うしても自分の力で脚を伸ばすことは出来ないのである、催眠状態の特徴は上述の他にまだ幾種もあるが其のうちでも一見真に奇妙なのは強直状態といふ一種である、此の強直状態といふは何ういふ風になるものであるかといふに、全身が恰かも棒の如く硬ばつて真直になつてしまつて曲らないのである、其うして此の状態の起る理由は、全身の隨意筋が充分強く緊縮する爲めであるが、前に述べたる不隨状態の全身に凝りたる結果で、不隨状態即ち一部の隨意筋に對する觀念が、一たび被術者の腦裏に印象せらるゝと、其の觀念が久しく固定して消えないことがある、此の強直状態といふは斯の如き緊縮が殆んど全身の隨意筋に及ぶのである、而して此の状態を起すのは、メスマルの催眠方法即ち施術者の手の運動に依つて催眠させる方法（悉しくは簡易速成催眠術第四章に説くを参照すべし）が最も適當なのであつて、他の方法では此の状態を起させるのは頗ぶる困難なのである、殊に言葉の暗示のみでは到底起すことが出来ない

のである、されど其の道理からいへば、上來述べたる他の徴候の生ずるのと同じことで、矢張り觀念の筋肉に及ぼす作用なのである、唯だ其の異なつて居る所は、其の觀念が久しく固定して居ることに過ぎないのだ。

また催眠状態になると凡ての感覺が非常に鋭敏になるので、覺醒状態の時には感別することが出来ないものでも明らかに感別することが出来るやうになる、例へばニンバスの両脚で皮膚に觸つて見るに、普通では到底感別することの出来ない短かい距離でも、催眠状態に在つては其の両脚の觸れたる二點を感別するのであつて、また其の距離が短かい程觸感が鋭敏になるものだ、其れから眼に厚い眼障をして歩かせるも、或は眞黒闇の處を歩かせても、決して物に衝き當るなどのことがなく、また皮膚から五六分程も離れて居る物を、よく知覺することが出来るのである、此れは壓感や温感の鋭敏になりし爲めで、即ち空氣の抵抗の具合や温度増減の變化とに依つて、外物を感識するのであるが、此の他視感、嗅感、聴

感、筋肉感も亦た同じく鋭敏になるのである、例へば催眠状態になると視力が非常に鋭くなる爲めに、不透明な木の板などの表面に書いてある文字を裏面から明らかに見ゆるやうになる、即ち尋常の場合にて到底感識することの出来ない微少な光線に感ずるのである、また嗅感も亦た同一であつて鼻の感覺のみで色々な物を感別することが出来る、例へば數人のハンカチーフを集めて、催眠状態に在る者に其の持主を感別せしむるに、其の持主數人の身跡とハンカチーフとを嗅いで、其れで持主を感別するのである、また尋常の場合では聴こえない音響をもよく聞き別けるのである、其れから筋肉に就ては、四肢の位置の極微少な變動をも知つたり或は音聲や言葉を眞似ることが頗ぶる巧みになつたりするのである、然るに此れ等の感覺の鋭敏といふ事は、何ういふ理窟から起るのであるかといふに、此の原因に就ては學者間に色々な議論もあるが、畢竟は暗示の爲めに大脳中枢が或る一種の刺激にのみ注意を集むるに適するやうな状態になるのであらうと

思はれる、其れで暗示されたもののみ注意が向ひ、其れが爲めに一種の刺激に對する感別力が非常に過敏になつて、普通の場合には到底感じない極く微かなる光線や臭氣やまたは音響などの位置の變動だのに感するやうになるものと考へられる、而して催眠状態は是れ等の感覚が過敏なるのみならず、また有機感覚或は普通感覚と稱するは即ち氣分の善し悪しとか、空腹とか、腹痛とか、頭痛とか、疲労などいふやうな身体一般の状態或は一部機關の状態から起る所の感覚の變状を來すものである、例へば暗示に依つて沈鬱なる人を快活ならしめ、快活なる者を煩悶せしめたり、または空腹なる者の食欲を無くしたり、飲食を充分なるも満腹になり居る人に食欲を起させたり、或は腹痛や頭痛を訴ふる者の痛みを即時に止むるとか、若しくは力役の爲め疲労せし人の疲労を忘れしむるなどのことが出来るのである、また有機感覚の一種なる疼痛の如き、暗示に依つて起さしむることも出来れば、無くしてしまふことも出来る、例へば最も激烈なる外科手術を施し

ても、毫も疼痛を感じない程無感覚になることがある、併し此の場合でも觸感が全く無くなつて了ふものでは無い、物が觸ると觸つた事だけは感するので、單に疼痛の感覚のみが無くなるのである、されど此の疼痛無感といふことは甚だ稀れなことで、大抵の場合にあつては其の感じが鈍くなるのである、また微少なる事でも非常に疼痛を感じさせることは容易であつて、例へば刀で斬られたと言へば本統に刀で斬られた疼痛を起し、沸湯を浴びたと言へば、沸湯で火傷をした疼痛を感するのである、其れのみならず暗示に依つて色情を起させることも出来る、色情を制止することも出来るのである、此の他有機感覚と密接の關係を有して居る所の心の調子などを變じさせることも随分出来るが、此れは催眠の方法如何に由つて其の結果は一樣にならない場合がある、また欲望や感情も暗示の爲めに支配されるものであつて、愛憎、恐怖、憤怒、喜悅などは容易に生せられるものである、斯くすることの變状は普通の場合にも暗示の力で出来るものだけれど

も、催眠状態にある時は、其の度が非常に強くなるのである。

また催眠状態に於て著しき徴候の一つは感覺の幻惑即ち幻覺や錯覺である、此れは唯だ施術者が一言の暗示を與ふれば忽ち生ずるのであるが、また施術者の形容でも其の觀念をさへ起さしむれば容易なのである、さて其の幻覺といふのは何ういふ現象であるかといふに、此れには積極と消極との二種ありて、積極的幻覺といふのは、全く無い物が現に在るやうに思ふのであつて、消極的幻覺は前のご反對で實際在る物を無いと思ふのである、また錯覺といふのは、何か外感を刺激するものがあると、其れを全く間違つて知覺すること、例へばハンカチーフを見て書籍と思ふたり、椅子を見て馬と思ふたりするやうな類ひである、此の幻覺や錯覺は、精神病者などには常に現はれるものであるが、催眠状態になつて居る人は、施術者の暗示一つで其れが生ずるのである、而して此の幻覺と錯覺とは何の方が起し易いかといふと、錯覺の方が起し易いので、幻覺は其の外感

に特別の刺激を與ふる物の全く無い場合に、言葉の暗示のみで起さうとしても成効しない事が往々あるものだ、其れから此の感覺の幻惑は、視感、聽感、嗅感、味感、觸感、壓感、温感、疼痛感等、外感は何れにても自由に起させることが出来るのみならず、また其の數種を一時に起させることも出来るのである、其處で視感上の積極幻覺、即ち全く無い物が現に在るやうに見たるのは、被術者が眼を開いて居る時よりも閉ぢて居る時の方が起し易い、恰も夢の場合と同じやうな具合で、被術者は眼を閉ぢて居ながら、眼を開いて見て居ると思ふので、實際自分の眼を閉ぢて居ることは少しも知らないのである、併し被術者の眼を開かせて幻覺を起させることも亦た自由に出来るのであるが、此の場合には被術者が眼を開くと同時に暗示を與へることが必要である、さうでないで眼を開いた爲めに全く催眠状態が醒めて了ふことがある、其れから視感の積極的幻覺といふは、前にも述べたる如く、例へば其處に居ない人でも施術者が居ると言へば、被術者には其



れが實際人が居るやうに見え、また聴感の幻覺に就ては、例へば施術者が手を叩いて大鼓の音だと言ふと、被術者には其れが實際大鼓の音に聞え、或は何の刺戟を與へないでも、施術者が「小兒の啼聲が聞える」と言へば、被術者には直ぐ小兒の啼聲が聞えるのであるが、此の例の前の方が錯覺で、後の方が幻覺なのである、また嗅覺に就ては、例へば施術者が、土を嗅がせて麝香だと言ふと、被術者は眞の麝香だと思ひ好い香いを感じ、或は茶を葡萄酒だと言つて飲ませると、被術者は葡萄酒と思ふて飲み、煎豆を金米糖だと言つて喰はすと、被術者は眞の金米糖と思ふて喰ふ、其うして其の偽せ物を嗅いだり、飲んだり、喰つたりする時の容子は、眞正の物を嗅いだり、飲んだり、喰つたりする時よりも、一層快い甘さうな容子を表はすのである、其れから例へば施術者が被術者に向つて、「お前は熱い湯に入つて居るのだ」と言ふと、被術者は忽ち熱さを感じて、汗を滴らしてハンカチーフで切りに額を拭ふやうにする、此れは温感の幻覺であつて、また

施術者が、被術者に向つて、「お前は重い荷物を負ふて居るのだ」と言ふと、被術者は忽ち重量に堪えられぬやうな容子をする、此れが壓感の幻覺を起したのである、また例へば施術者が、被術者に向つて「お前の頸筋を蜂が刺いた今に痛みが起る」と起ると言ふと、暫らくして被術者の頸に痛みが起り、「お前の手に頭癩が出来て居るから今に痒くなる」と言ふと被術者は忽ち手が痒くて堪らなくなる、此れ等が痛痒感の幻覺なのである、斯くの如く施術者の一言ですべての感覺を幻覺させることが自由出来るのみならず、前にも既に述ぶる如く、其の各種の幻覺を幾種も一時に起させることも出来る、例へば施術者が被術者に向つて、「茲に銘酒が澤山あるから飲め」と命ずると、被術者は甞に銘酒の澤山あるを見たばかりではなく、實際無いものを洋盃に注いで香りを嗅ぎ、其れから飲んで如何にも甘味さうな顔附をし、また次第に顔が赤くなつて来る、之れ即ち視感と觸感と嗅感と味感と及び筋肉感とに働きを起したのである。

其處で此の幻惑といふものは全寐何うして起るのであるかといふに、畢竟催眠に在る人間は暗示を與へられると、宛かも熟睡して居ると同じやうであつて、其の上に暗示に對して感應する性質が非常に強くなつて來るのである、其れで唯だ暗示に感應する性質のみが強くなつて、其の外には少しも外感の刺激に應せず、また他の觀念の起ることが無いのである、其ういふ状態に成て居る處へ暗示を與へられるのであるから、意識に現はるものは唯だ暗示された事のみであつて、其れを反證する他の觀念は一つも無いのである、其れだから如何なる事でも暗示された通りに確信するやうになるのだ、而して其の觀念が動神經を刺激して、全く實際の場合と同じ結果を身軀上に生ずるのである、また幻覺の一種なる消極的幻覺に就ては、頗ぶる面白い現象を表はすもので、物軀若くは人軀の一部分だけを全く見なくなして了ふ事も出來れば、また其の一部分だけを見なくなして他の部分は其のまゝに見ゆるやうにすることも出来る、其れからまた被術者をして

一種の色のみは認められるが、其の他の色はすべて認識することの出來なくすることも出來れば、之れに反して一種の色だけを認識することを妨げることにも出来るのである、此れは視感の消極的幻覺であるが、其の他何の感覺でも消極的幻覺として全く停止して了ふことが出来るのである。例へば施術者が被術者に向つて、「お前へは啞だ」と言へば忽ち啞になり、「お前は聾だ」と言へば被術者は何の音響をも聞けなくなり、「お前は盲目だ」と言へばまた盲目の通りに何も見なくなると、其處でまた施術者が一言の暗示を與ふれば、其の感覺作用は回復することが出来る、併し此れは感覺機關其のものに變化を生じた爲めでなく、全くは精神作用の結果なのである、即ち感覺機關は通常の如くに其の作用をして居るのではあるが、唯だ腦の中樞作用が意識を起すに至らないからである。

此の消極的感覺を起すこと、即ち一言の暗示で其の感覺機關の全く無くなつたやうの現象を表はすのは、甚だ不思議のやうに思はれるか、理窟上から考へると左

程不思議な事では無いのだ、要するに現に在る物を暗示の爲めに全く無いと思ふやうになるのは、暗示に依つて其の物は無いと確信せしめられるからである、其の物が實際外感を刺戟して居ても、此の確信の爲めに全く其れに注意が向かないから、其れを認識しないのであつて、實際感覺機關に何の變状をも起した譯ではないのである。

以上述べたる數項は孰れも催眠状態に於ける特殊の徵候であるが、猶ほ此れ等の他にも種々の變化を起すものが種々あるので、其れは如何なるものであるかといふと、施術者の暗示に依つて、被術者の不随意筋及び身軀の組織並に分泌作用等に影響を及ぼすことである、此れから其の事に就て少しく述べやう

催眠状態に在る人の不随意筋に及ぼす影響といふは何んなことかといふに、被術者が被術者に向つて、「お前の腹が鳴る」と言へば、忽ち鳴り出し、また「覺醒後お前の腸は動くぞ」と言つて置くと、覺醒後被術者の腸が果して動くのである、

其れから嘔吐の暗示を與へると忽ち嘔吐を起し、また砂糖を飲ませて下劑だと言へば、覺醒後に下痢を催ふすやうになり、或は便通の速かな性質のもので、「お前は覺醒後二日間便通がない」と言つて置くと、被術者の便通が其の通り二日間止まつて居るのである、此れ等の作用は意志の支配を受けて居ないのであるが、併し精神作用の支配の下には立つて居るのであるから、暗示に依つて惹き起される觀念の影響を受けて斯ういふ結果を生ずるのである、而して不随意筋に受くる影響は此の他に猶ほ血管及び心臟等にも及ぼすもので、暗示に依つて身体の温度を進退させることがあり、また身体の一部に充血させることも出来る、此れは精神状態の影響を受けて管血に變動を起すのである、其れから暗示の作用で脈搏を増減させることもあるのだ、また呼吸作用といふものは普通の場合には不随意運動であるが、場合に依つて有意的に變せらるゝものであるから、言はば隨意運動と不随意運動との中間にある作用である、此の作用も亦た暗示に依つて變化

を起さしむることが出来る、例へば呼吸を緩やかにしたり、激しくしたり、または數分間止めて置くことなども出来るのであるが、併し全く止むるといふことは危険であるから、古來の學者の實驗にも僅かに一分間以内しか長く止めなかつたのである、中には數分間止めて置いたと言つて居る人もあるが、其れは實際全く止めたのでは無く、外觀上止めた如くに見えても、微かなる呼吸は續いて居たのであらうと思はれるのである、次には身体の組織に變化を及ぼすことに就て少しく述べやう。

催眠術に依つて身体の組織に變化を起すことが出来るや否やに就ては、學者間にも種々の説があつて、全く其のやうなことは無いといふ論者もあれば、現に觀察したと稱して居る事實も澤山あるが、併し身軀の或る部分に變化を起すことだけは確實のやうである、例へば平常に於ても外科手術を施されんとする婦人が月經に變化を起すやうなことは屢々ある如く、暗示に依つて月經を止めたり、速め

たりすることは容易なのである、此れは全く暗示が血管神經に變動を起し、其の變動が遂に有機的變化を起すのであらうと思はれる、また暗示に依つて被術者の身軀に腫物を生ぜしめたり、創傷痕を生ぜしめることが出来るのは、古來學者の實驗して居る所である、例へば被術者の身軀に紙片または布片などを貼りつけて、「お前の身体に腫物が出来た」と言つて置くと、其の紙片や布片を貼りつけて置いた所の皮膚が赤くなつて其れから腫物の如きものが出て来たり、また被術者の皮膚に或る物体を押し附けて、其れと同時に「お前の皮膚は火傷をした」と言つて置くと、其の場所だけが必らず火傷をした通りになりて、其の痕が長い間存在して居るやうなこともあるし、或は皮膚の一部分を木片竹片若しくは鈍い刃物のやうなもので切るやうに撫でて、其れと同時に「お前の皮膚に切疵が出来て、其處から血が出る」と言つて置くと、覺醒後必らず其處から血が出で、全く切疵の如くに其の痕が永く残つて居るのである、此の他身体組織の變化に就て、色々の説も

あるが確實に變化の生ずるのは、上述の如きもので其の他は未だ確實と認め難いのである、何故かといふに何うも他に其の原因があるのであらうとの疑ひがあるから、其れ等は不確實と認めて置くが至當であらうと考へ、茲には省きて言はないで置き、次には分泌作用の變化を述べやう。

催眠状態に在る人は暗示に依つて分泌作用に變化を生ずることは、古來多くの學者も充分に認めて居るのであるが、汗、涙、唾液、胃液、腸液、尿液、精液、乳汁などの分泌作用に就ては、既に實驗した學者も澤山あるが、併し汗の分泌は果して暗示の結果であるか、また注意凝集の結果であるか、其れは甚だ疑はしいのであつて、ドクトル、モールなどは注意凝集の結果より發汗するのであらうと言つて居る、強ちそうばかりとも言へない、例へば「お前は酷く熱いので顔に汗が流れて居る」と言ふ暗示を與へると、被術者の顔には忽ち汗が流れるのである、此れは熱いといふ點に注意を凝集する爲めとも言はれない、寧ろ暗示の働

で分泌作用に變化を起したといふ方が事實なのである、其れと同じ道理で、被術者に一種の感情即ち悲しいとか、悔しいとかといふ感情を起させると、忽ち涙を分泌させることが出来る、また唾液を分泌させることも同一の理なのである、其れから胃液の分泌に就ては、或る醫師は暗示に依つて胃液の不足な人を常態に回復させたと言つて居るが、果して事實であるか、或は他の原因があつて其ういふ結果を生じたのか其れは疑はしいが、併し其ういふことも無いとは言へないのである、其れから腸の分泌作用に就ては、ウイエンの教授クラフトエビンの實驗に、氏は或る被術者に向つて、腸が澤山液を分泌するといふ暗示を與へたが、果して其の通りの結果を生じたといふことである、また氏は被術者の膀胱を空虚にして置いて、其れから暗示に依つて小便をさせ、其うして其の尿水の試験をして見たのに、其の中には極めて少量の尿酸塩しか無かつたのである、其れで氏は小便に出た此の液は、腸の分泌作用の増進せし結果に相違ないと言つて居るので

ある、また尿水や腎液の分泌も矢張り、此れと同じく増進することが出来るのであることは、多くの實驗者の證して居る所であつて、また乳汁の分泌に就ては種々の實驗の結果を發表して居る學者も澤山ある、中にもハッセンスタインといふ人は、乳の全く停つた乳母に暗示を與へた所が、其れに依つて再び乳が澤山出たのである、此の乳母は小兒の事に就て精神に刺戟を蒙つて、其れが爲めに乳が停まつたのであつた、其れが暗示に依つて其の刺戟を除かれた爲めに、再び乳の分泌が回復したのであるといふ事實を擧げて居る、だから此れは暗示の間接の結果であるが、また英のカール、グロッスマンの報告には、直接に暗示が乳汁の分泌を起した事を言つて居るのである。

斯くの如く催眠状態に在る人に暗示を與へると種々の現象を現はすものであるが、上來説示せるものは孰れも生理的の徴候であるから、次章に於ては其の心理的の徴候の重なるものを擧ぐることにする。

## 第八章 催眠状態の心理的徴候

前章に生理的徴候として述べたるものも、嚴密な意味から言へば全く心理的徴候なのであるが、殊更に區別したのは、前章の分は神経の末端及び筋肉に關するものにして、孰れも生理に關聯すること深きものなるを以て、便宜上生理的徴候として擧げたのである、其處で本章に於て述べんとするものは、全く生理に關聯せざるもののみを心理的徴候として擧ぐる積りであるのだ、さて其の心理的徴候と稱するは如何なるものであるかといふに、唯だ大脳中樞の作用に關する現象にして、乃ち記憶と意識に關する現象を述べやうとするのである。

人間が普通覺醒の状態に於ての記憶は、恰かも鎖の如くに連續して居るものであるが、催眠状態に在つては其れが何うなるかといふに、淺い催眠状態に在つては少しも異狀を呈することはないのであつて、覺醒の時をも一々記憶して居るし、

また覺醒してから後に催眠状態中についた事をば悉く記憶して居るのである、されど其の状態が深くなると、大に其の趣きが異つて來るので、覺醒後には催眠状態中に在つた事を記憶して居ないのである、だから被術者は覺醒してから、催眠中に行つた事や、幻覺を見た事などを聞いて大に驚くのが例だ、併し夢の場合の記憶のやうに朦朧たる記憶の覺醒後にも残つて居る事も屢々ある、例へば催眠状態に在る人に向つて、其の席にオルガンの有る幻覺を起させる、其の傍に往きて眺めて見たり、また其れを弾じたり、或は其の音色の美さに聞き惚れて居るやうな容子を表はすのである、其れを一たび醒ますと、唯だオルガンを見た事だけを朦朧と記憶して居るのみで、其の他の事即ち自分が起つて往つて弾じたり、また美音をも聞いた事などは、全く忘れて居て決して其のやうな事のあつたのを信じて居ない場合がある、されど人に由つては、催眠中に在つた事を話されると、其れを一一々思ひ出すものもある、それから或る場合に於ては、觀念聯合の作用の爲めに忘

れて居た記憶を喚び起す事もある、例へば覺醒後に催眠中に在つた事を、一寸と言ふと、その一言からしてあつた事を一々思ひ出す事があるのだ、是は丁度夢を見て一時其れを忘れて居たのが、何か其の夢の中にあつた事を思ひ出すと忽ち残らず思ひ出す事があつたり、或は以前に聞いた談話を長らく忘れて居たのが、何かの場合其の端緒を想ひ出すと、其の談話の全体の記憶を喚び起す事などがあるのと同じ理窟であつて、例へば催眠状態になつて居る人に暗示を與へて演戲の現物をして居る幻覺を起させたりする、其うすると舞臺の飾り附けの善し悪し、俳優の演藝の品評などをしたり、飲食をしたりする幻覺を起して、全く眞實に演戲見物をして居ると違はない形容を現はすのである、されど覺醒してからは少しも記憶して居ないのであるが、併し其の中の一部即ち演戲の話しをすると、催眠中に在つた事を残らず思ひ出すやうなのである、其れがまた覺醒後に一時は全く忘れて居つて想ひ出すことが出來なかつたにしても、日が経つてから不圖した事か

ら其れを想ひ出すやうな事もある、例へば催眠中幻覺に於て出遭た人などに不圖  
 出會ふやうな事があると、其の爲めに以前催眠中に在つた事を残らず想ひ出すや  
 うな場合もある。併し是れ等は左程深い状態に陥つて居なかつた場合の事である  
 が、其れよりも尙ほ一層深い催眠状態にあつては、覺醒後如何なる場合があつて  
 も少しも想ひ出すことの出来ない場合がある、其處で斯ういふ深い催眠状態に陥  
 ると、記憶が全く消滅して了ふのであるか、或は記憶は全く消滅したのではない  
 けれど、其記憶を喚び起すに適當な場合に出遇ないのであらうかといふに、恐く  
 は後の方の説の通りで、適當な場合に出遭はないのだらうと思はれる、何故かと  
 いふと其れには斯ういふ理窟がある、其の記憶の全く消滅して居ない證據には、  
 其の人を再び催眠状態にすると、以前の催眠状態中にあつた事を残らず想ひ出す  
 ことがある、此の事に就ては歐米の學者も屢々實驗して其れに相違ないと言つて  
 居るのであつて、假令普通の方法では何うしても想ひ出させられない程深い催眠

状態にあつても、其の記憶が全く消滅して居るものとは決して言へないのであ  
 る、此れは先づ其うとして置いて、其れからまた普通覺醒の時の事をば、催眠状  
 態になつた時に想ひ出すことが出来るか何うかといふに、是れ亦た容易に想ひ出  
 すものである、場合に於ては久しい間全く忘れて居つた事をも、催眠状態になつ  
 て残らず想ひ出す事がある、此れが亦た催眠状態の一徴候なのである、而して此  
 の永い間全く忘れて居た事を想ひ出す事、即ち回想力の昂進に就ては、古來種々  
 の實例が頗ぶる多く、其の理窟を知らない人は頗ぶる奇異とも不思議とも思ふ事  
 實が澤山にある、今左にその一二を擧げて見やう。

米國のアックステルといふ催眠術研究家が、或る時一人の露國士官を催眠させた  
 のに、其の士官が突然支那語を語り出した、其れで覺醒後に其の事を談すと、其  
 の士官は十數年前支那に駐在して居つた時に、少しく支那語を學んだのを、其の  
 後全く忘れて居つたのを、催眠状態になつて想ひ出したのであつた。



また獨逸のフオレル教授の實驗中にも、或る時一人の無學なる水夫を催眠させたのに、其れが高尙なる佛語を語り出した、此の水夫は佛語などは少しも知らなかつたのであるが、若い時分に軍艦修繕に就て、佛國の或る港に停泊して居つた時、佛の士官が屢々來つて、其の軍艦の乗組士官と對談して居つたのを、始終傍らに居て聞いたのであつた、然るに覺醒の状態に於ては無論其れを心に留めて居なかつたのだが、催眠状態になつて其れを想ひ出して語つたのである。

此れ等と同じやうな回想力の昂進は、夢の場合に於ても往々現はれるので、覺醒状態の時には全く記憶に留めて居なかつた事をも、夢の中に其れを想ひ出した事實もあれば、またヒステリー患者には一種の精神的状态になると、普通覺醒の時に決して想ひ出せない事を一々回想するものがあるのだ。

催眠状態と記憶との大体の關係は以上述べた通りであるが、併し此れは暗示の働きの多分に加はつて居ない場合であつて、此れに暗示の働きの加はると、更に

また色々な變化を及ぼすことが出来るのである、元來記憶といふものは過去の經驗に基くものなのだ、ところで暗示に由つて過去の經驗を一變してしまへば、其れに随つて記憶も亦た一變する譯なのである、而して過去の經驗を一變せしむるには、何うすれば宜いかといふと、過去の經驗に就て全く違つた考へを起させるのであつて、即ち過去に關する幻覺を作るのである、暗示を以て被術者の記憶を作らせたり、また無くしたりするのである、例へば施術者が被術者に向つて「お前は昨日相撲を見に行つて居たのなら、其の取組や勝負をよく知つて居る筈だ」と言ふと、被術者は其の通り實際相撲へ行つたものと確信して、其の談話を色々し始る、此れは暗示に依つて過去の積極的幻覺を起させて、實際無い記憶を催眠状態に於て作らせるのである、また施術者が被術者に向つて「卿は此の寒中に今朝から帷子一枚で居るのだ」と言ふと被術者は其の通りに確信して、其うして寒くて堪わられぬ感起すのである、此れは前のは全く反對で、過去の消極的幻覺

を起させ、實際ある記憶を無くして了ふのであつて、即ち着物を温かに着て居ることを全く忘れさせて了ふのである、其れからまた前章にも言つて置いた、或る種類の運動が出来なくなるのも、全くは其の記憶の停止され幻惑さるゝに由るのが多い、全麻人間が運動をするには、其れに關する記憶が先づ必要なので、此の記憶がなかつたならば運動は出来ない、例へば、一つの事をするには、先づ其の事に對する記憶が必要なのである、されば催眠状態にあつては、其の記憶が全く無くなる爲めに、何等の運動をも出来ない場合があるのだ、併し此れは單に一種の記憶が無くなるのであるが、此れと同じやうにすべての記憶を無くして了ふことが出来る、例へば施術者が被術者に向つて、「君は生れてから此の方の事を一つも記憶して居ないのである」といふ一言の暗示を與へると、其の人は其の通り生來の記憶が全く無くなり、何を問ふても少しも答へをすることが出来なくなるのである、是れよりも一層興味のあるのは、暗示に依つて被術者を全く過去の生活

に還らすことが出来る、例へば老年者を少年時代に還らすと、被術者は全く少年に還つて了つて、其の言語動作はすべて少年時代のものになつて了ひ、其れより以後の事は少しも知らないのである、此れに就て著者の實驗した事實を示さう、予(著者自ら云ふ)は四十三歳の男子を催眠させて、十歳の兒童になつたことを信じさせた、ところが其の男子は兒童のやうな聲を出して、自分は某小學校生徒となつて、体操をして居るのだと言つて、其の身振りをして居る、其處で予が號令をかけると、其の通りに運動をしたのである、其れから被術者を覺醒させて催眠中の事に就て問ふても、少しも記憶して居らなかつた、斯ういふ事實は澤山にあるのみならず、時としては被術者をして全く生れなかつた事を信じさせることが出来る、而して此の場合に於ける被術者の意識は絶對的空虛になつて居るのだ、また暗示に依つて新しい記憶が作られる時には、古い記憶は全く消えてしまふものであつて、此の場合には被術者は自分を全く別の人物で別に存在して居

るかのやうに信じて居る、其うしてまた自分の人格と關係して居る色々の記憶が消失するのみではなく、其の幾分か残つて居る記憶をも、自分の新しい人格に結び付けやうと務めるのである、此の現象は甚だ奇妙なものであるが、多くの學者が實驗した事實で、頗る面白い現象なのである、予の實驗中に予が被術者に向つて、「君は李鴻章だ」と言つた、すると其の人は李鴻章の積りて、馬關で負傷した時の容子をした、併し此の人は支那語を知らなかつた爲めに、矢張り日本語で話しをした、覺醒後其の事を尋ねると少しも知らない、其うして馬關の負傷の時の眞似をしたのは、嘗つて其の事を新聞紙で見たり、また其の時の容子を聞いた事があつたので、其れを話したのであつた、また暗示の記憶に變化を與へて幻惑させるに就ては、此の他に猶ほ面白い事がある、其れは暗示に依つて被術者を他の動物や無機物にすることも出来る、例へば「お前は馬だ」といふと、全く馬の積りで駆け廻つて、馬の啼き聲を出す、また被術者に向つて「お前は机だ」と

いふと、全く机の積りになつて、手脚を突きて机のやうな容子をするのである、斯ういふ現象は、我が國に古來より「狐つき」とか或は「狸つき」とか稱して居る精神病者と同じやうで、此れ等の患者が自分を全く狐だとか、狸だとか信じて居るのと、此の催眠状態に在る人が暗示に依つて自分を他の物牀のやうに信ずるのとは、共に同一様の精神状態なのである、催眠状態に於ける暗示の働きが、被術者の記憶を變ずることに就ては、以上舉げたるものゝ外、猶ほ述べべき事は澤山あるので、また其の影響は催眠状態に在る場合のみならず、其れを覺醒後に續けて置くことが出来るのである、其れを續けさせるには、覺醒前に施術者が被術者に向つて、「君は覺醒後にも此の事を記憶して居て、其の通りするに相違ない」といふ暗示を與へてさへ置けば、其れが覺醒後に作用を及ぼすのである、また其の中の一部だけを記憶させて置くことも、或は一部分だけを忘れさせて、其餘を残らず記憶させて置くことも出来るので

ある、催眠學にては之れを名づけて殘續暗示と稱するのである、

また此の催眠中に與へた暗示を覺醒後に殘續せしむることは、醫術上や心理學上には極めて必要な作用である、何となれば如何なる暗示でも、催眠中に一たび結果を現はしたものは、覺醒後に其の影響を及ぼすので、例へば運動、幻覺、疼痛、痒感、飢渴、腸、胃、膀胱等を始め、種々の作用が、暗示に依つて覺醒後に起し得らるゝのであるから、治療上頗ぶる便利なることが澤山ある、其うして心理學上の研究にも頗ぶる裨益することが少なくないのである。

既に前にも述べたる通り、被術者は催眠状態中に在つた事即ち暗示を與へられた事は、覺醒後には大抵其れを記憶して居ない、だから覺醒後に至つて催眠中に暗示せられた事を實際に行つて居ながら、自分は少しも其の事を知らないのである、然らば被術者が催眠状態中に暗示された事を覺醒後に至つて行ふ時には、何ういふ積りて行つて居るのであるかといふに、例へば、被術者に向つて「お前は

覺醒すると此の汚れた茶器を拭き清めるに相違ない」といふ暗示を與へると、其の人は覺醒すると、暗示の通りに茶器を拭き清める、其處で施術者が何ういふ積りで其れをしたかと問ふと、被術者は「私は茶碗などの汚れてあるのを好まないから拭き清めたのである」と答へる、併し此の場合に被術者に突然斯ういふことをするのは、全く催眠中に與へられた暗示の働きのなのであると、其の人は少しも其のやうなことは知らず、唯だ潔癖の性から、自分が勝手に其うしたものであると信じて居るのだ、また被術者に向つて「お前は覺醒すると、自分の帽子を取つて椅子の下に置くに相違ない」といふ暗示を與へて置くと、覺醒後に屹度其の通りにする、其處で何故其のやうな可笑な事をしたかと問ふと、其の理由を言ふことが出来ないで、唯だ「其うすべきやうに心に浮んだからだ」とか或は「其處へ置かんければならぬやうな心持がした」とか答へる、其うして被術者は始めには、自分が勝手に其の事をしたやうに信じて居たのが、終には、何か自分を牽

束するものがあるらしく感じて来たのである、されど其れが暗示の作用だといふことは少しも知らないのだ、また施術者が被術者に「君は覺醒後予の頭を打つに相違ない」といふ暗示を與へて置くと、被術者は覺醒後暫くは何だか心のうちに煩悶を感じて居る容子であるが、突然手を舉げて施術者の頭を打つ、ところで施術者が「何故予の頭を打つたか」と問ふと、切りに詭言をして下のやうな言譯をする、「何だか貴下の頭を打たなければならぬやうな心持ちがしたのである」と、此の他にも猶ほ色々の事實が現はれるのであるが、それ等は被術者は、自分の行つた事を決して馬鹿げた事とは思ふて居ないので、其れに就いて色々の理由を語るのである、また全く馬鹿氣な働きをして居ながら、自分は或るものに牽制されて居るといふ事を少しも知らず、其の行ひに對して相當なる理由を見出さうとするのである、其れが即ち被術者は自分では隨意の働きをして居るのだと信じて居るからであつて、實際暗示の爲めに牽束されて居ることを知らないからである、

また殘續暗示の働きに依つて、被術者をして普通の状態に於ては爲すを好まざる事をも行はしむることが出来るのである、例へば覺醒の時に好まない事を、催眠状態にして置いて暗示すると、覺醒してから其れを行ふに、始めは少し躊躇するが、遂には其の暗示に強制されて其れを行ふやうになる、斯ういふ行爲は往々精神病的状态に於て現はるゝ所の衝動的行爲に極めて類似して居るのである、精神病的状态に在る者に於ては、火を見たと何でも焼きたくなつたり、または人殺しをしたくなつたりする欲求の起るものがある、覺醒後殘續暗示の働きを現はす爲めの動機を見るに、被術者が感ずる所の衝動は丁度此れと同じやうである、催眠術を施された者は此の衝動に對して幾分か抵抗することがあるが、此れと同じやうの抵抗は精神病者に於ても見る所である、

以上の如きものは、被術者が催眠状態に在つて暗示を與へられた事を覺醒後に於て少しも記憶して居ない場合であるが、併し此の記憶の消失といふことは必ずす

しも必要なのではない、覺醒後に至つて催眠状態中の事を悉く記憶して居る場合でも、殘續暗示の確かに成効することがある、斯ういふ場合は甚だ稀れではあるが、古來の實驗に於て往々現はれて居る事實があるのだ、殘續暗示の強制的作用は斯ういふ場合に於て一層明らかに認められるのである、其うして被術者が其れを行ふ時には何ういふ氣持ちであるかといふに、自分は催眠中に暗示を與へられたのを一々記憶して居るが、併し何しても其の暗示に従はなければならぬやうになるのだ、と言つて居る、要するに殘續暗示に對して被術者が感ずる所の衝動は、彼の精神病的患者が、自分が不幸の状態にあることを充分知つて居ながら其の衝動に強制されて居るのと同じで、殘續暗示に支配されて居る被術者は、其の動作の愚かしく馬鹿々々しさものなるに心附いて居ながら、遂に其の強制に服従して了ふのである、催眠状態と記憶との關係は先づ此れ位にして置いて、次に催眠状態に於ける意識に就いて少しく述べやう、

前に述べたる通り催眠状態になると記憶に大なる影響を及ぼし、被術者の記憶は全く消失して了うやうに見ゆるのであるが、其れに就て催眠状態になつた者の意識も亦た全く無くなつて了ふものであらうか何うかといふことをは少しく述べやうと思ふのである、其處で此の催眠状態には意識が有るか無いを論ずるに先だちて、一言して置かんければならぬのは、普通にいふところの意識の有無と、心理學上に於ける意識の有無との見解の異なる點である、心理學上にて意識といふ場合には、一切の心的現象を指すので、精神病的の想像にしる、催眠中の夢にもしる、苟しくも心的現象の現はれて居る限りは、すべて皆な意識があると言ふのである、また普通の場合殊に法律上などに於て意識といふのは、之れとは稍や趣きが違つて居て、此の場合に意識があるといふのは、正氣な意識を持つて居るといふことなのである、だから意識の無いといふのも、心理學上よりいふと如何なる心的現象も絶對的に現はれて居ない事を言ひ、普通の

場合殊に法律上などでいふと、精神病的だの夢などは、全く意識を失つて居るものと見做すのである、而して催眠術に於ける意識といふのは、其の何れの方の意味でいふのであるかといふに、心理學上の意味でいふのである、されば催眠術には苟くも心的現象の現はれて居る以上は、如何に變態の働きを爲し居る場合であつても、すべて皆な意識が有ると言ひ、従つて如何なる種類の心的現象も現はれて居ない場合に限つて意識が無いと言ふのである、であるから本書に於いて擧げたる意識といふのは、すべて皆な普通にいふ所の意識とは少しく異なつて居るのだ。

其處で催眠状態に於ては、此の意識が無いか何うかといふに、催眠状態に起つた事柄を、被術者が後に至つても一々記憶して居ることのあるは、淺い催眠状態には往々あることは、此れまで屢々實例を示した通りであつて、無意識でないといふことは、また少しも疑ふに及ばぬ所であるが、併し深い催眠状態に於ては、

被術者が催眠状態中に起つた事を覺醒後少しも記憶して居ない場合がある、然るに斯ういふ場合に於ても、催眠中の記憶を喚び起すに適當な事物に出會ふと、今まで忘れて居た催眠状態中の事を悉く想ひ出すことがある、のみならず全く忘れて居て如何なる事物に出會ふも想ひ出されないほどになつて居ても、其の人を再び催眠状態にすると、其の忘れて居た事を悉く想ひ出すものである、此れが若し催眠状態には意識が無いものとすれば、如何なる事があつても決して想ひ出すやうな筈はない譯である、其れが斯くの如く適當な場合さへあれば、催眠状態中のことを想ひ出すのであるから、少くとも其れを想ひ出すだけ意識のある事は明白である、其れまで想ひ出せなかつたのは、意識全昧の容子が變じた爲めに、或は其れを想ひ出すに適當な場合に遭遇しなかつた爲めに、唯だ忘れて居たのに過ぎないのである。斯ういふことは日常の經驗に於ても往々あるのであつて、充分な意識と注意とを以て働いて居る場合にも随分あることだ、例へば此れは紛失して

はならぬと思ふて、殊更に注意して藏して置いたのを、必要の場合に其の置處を全然忘れてしまつて、何程考へても其れが想ひ出されない、止むを得ず其のまゝ何か他の物で間に合はせて置くことがある、然るに時日を経てから他の事よりして、不圖其の置き所を想出すやうなことは、何人にも往々ある習ひである、是れは何ういふ理由かといふに、一時は全く其の記憶が無くなつて居たのであるが、併し其の始めに其の品物を藏する時には、充分意識があつたのみならず特に注意したものである、其れを想ひ出されなかつたのは、其の時には意識が別の状態になつて居たからである、催眠状態に於けるも結局は此れと同じ譯で、覺醒後に記憶が無くなつて居たからとて、其れで以て催眠状態中意識が無かつたものといふ断定は出来ないものである、だから記憶の無いことを以て、決して意識の無い證據とはされないのである。然れども催眠状態中の意識の状態と、普通覺醒の時の意識の状態とは、全く異つて居るには相違ない、特に深い催眠状態に至つては頗ぶ

る異つて居るのであつて、其の意識の状態が變じて居ることは少しも疑ふ所はないのである、併し變態にしる意識の現はれて居るだけは儘かな事實と言はなければならぬ、また催眠状態の意識は丁度夢のやうなものであらうと思ふ、其れは兎に角意識には違ひないのである、また催眠状態になつて居るときは考へは、覺醒の時の考へとは違つて居るので、老人が小兒だと暗示されて自分で小兒の積りの考へを起したり、或は自分が動物の考へを起したりする其の考へをば、客觀的の事實に照らすと間違つて居ることは言ふまでもない、されど斯くの如く意識して居る事柄が、客觀的の事實と適合して居ないといふ事と、意識其のものゝ無いといふ事とは全く別であつて、事實を考るとか不合てあらうか適合であらうか、既に考へたり感じたりする働きがあるとするれば、即ち其れが開ゆる意識に相違ないのである、

以上述べたる所に依つて催眠状態には意識の有るものだといふことは略ぼ了解さ



れた事と思ふが、今一つ世人の疑はしく思はるゝ點を擧げて其れを立證して置かう、

さて其の疑はしい點といふのは何いふことであるかといふに、催眠状態に在る場合に暗示を與ふれば其れに對して觀念が起るから、前に言へる如き意識も起るに相違ないが、然るに全く暗示を與へない場合には、被術者は眼を閉ぢて宛も熟睡のやうな状態になつて居るのである、斯うる場合には眞の熟睡の如く全く無意識の状態にあるのではないか、といふ疑ひなのであるが、成る程催眠状態にして置いて其れに暗示を與へない時には、一見熟睡のやうに見えて居のであるから、斯う疑ひの生ずるのも無理ならぬことである、が併し其の實相は全く熟睡とは異つて居るのである、何んで其の違つて居ることが判かるかといふに、如何なる深い催眠状態になつて居て、宛かも熟睡のやうに見ゆる場合でも、施術者が極めて微かな刺戟を與ふれば忽ち其れに感ずるのであつて、其の有様は恰かも施術者の刺

戟を注意して待ち受けてゐる居るかのやうな具合である、また施術者が與へると明らかに其の意味を理解するのである、其れのみならず施術者が「醒めよ」との一言に依つて忽ち醒めてしまふ、而して其の言葉は決して大きな聲で呼ぶ必要はないので、また其れが言葉でなくても宜いのだ、何か他の方法を用ひても同じことなのである、斯ういふ譯であるから、暗示を與へない場合でも決して無意識であるとは言へないのである、尤も其の時の主觀的状态は果して何のやうなものであるかは判然しないけれども、眞實の熟睡のやうに全く無意識なものとは何うしても言へないのである。

要するに人間の意識には二様の異つた状態があつて、例へば甲の状態にある場合には、甲に屬する記憶のみが起り、また乙の状態にある時には、乙に屬する記憶のみが起るのである、即ち催眠状態や、精神病的状態や、普通睡眠中の夢などの場合には、尋常覺醒の時には全く忘れて居て全く想ひ出せない事などが明らかに

意識に現はれて来る、また其れと同時に尋常覺醒の時の記憶は全くななくなつて居るのである、其れからまた覺醒の場合には此れと全く反對であつて、尋常覺醒の時に経験した事のみが記憶されて居て、催眠状態や精神病的状態や、夢の中に於て意識に現はるゝやうな事は全く忘れて居るのである、斯くの如く尋常覺醒の時の意識の状態と、また變態の場合の意識の状態とが異つて居るのであつて、即ち精神病学などで言ふ所の二重意識または重複意識と稱するものなのであるが、其の二重意識の解釋は、「簡易速成催眠術」の第十七章に於て悉しく述べてあるから、讀者は該書を一讀せられんことを望む。

### 第九章 催眠状態の性質と他の類似状態

#### この比較的説明

人間が催眠術を施されて居るときの状態は、何ういふやうな性質のものであるか

といふに、此の性質を明らかにするには、人々が日常経験して居る状態で、催眠状態と類似して居るものを列挙して、其れと比較するのが最も便利である、例へば人々が日常最も経験して居る状態で、睡眠の如きまたは睡眠中の夢の如き、これを催眠状態と比較して全く同一であるとすれば、催眠状態は睡眠若しくは夢と同じ性質の状態であると決定することが出来る、然るに其れを充分に比較して見て、其の間に性質の異なつて居る所があつたならば、催眠状態は睡眠状態或は睡眠中の夢と或る點に於ては頗る類似して居るけれども、斯う々々いふ點に於ては同じ性質のものではないといふことが判る、されば人々の自然に経験して、充分知覚して居るものうちで、催眠状態と最も類似して居ると思ふ種々の状態を挙げて、前例の如くに其れ々々比較して見れば、終には催眠状態が如何なる性質のものであるといふことが明らかになるのである、さて催眠状態と他の類似の状態とを比較するに先きたつて一言して置かんければ

ならぬことがある、其れは何かといふと、催眠術と稱する名のみである、元來此の催眠術といふ名稱は、前にも屢々言へる如く、英國のマンチエスターの外科醫ブレードが始めて用ひたるのであつて、被術者が或る物体を暫く見詰めて居ると、睡眠のやうな状態になる、乃ち其の生せられた状態に對して、ヒプノス即ち催眠といふ意味の語を用ひてヒプノシス即ち催眠状態と名づけたのであるが、併し我國に於て之れを催眠状態と譯して居るヒプノシスといふ語は、眠つて居る状態といふ意味に外ならぬのである、斯て歐洲諸國の語に於ては、ブレードが用ひた名稱が既に自然の睡眠と催眠状態との間に類似のあるといふことを示して居る、此れはブレードがさういふやうに考へたのみならず、暗示の新説を發見したるリーポール及びナンシー派の大家ヘルンハイムやフォレル教授の如きも亦た催眠状態をば普通の睡眠と同じ性質のものとして考へてゐるので、其の意見は即ち自發的に睡眠するものは、自己の自然通りになつて居るし、催眠術を施されたものは、

施術者の意志通りになる、單に此の一點のみが催眠状態と普通の睡眠との違つた所で、其の性質は同一のものであるといふのであるが、此の説には容易に同意し難いのであつて、此れは唯だ外見と或る點が類似して居る所から言つたもので、精密に比較して見ると重要な點に於て大に相違して居るのである、而して此の催眠状態と普通の睡眠及び睡眠中の夢の状態との比較は、「簡易速成催眠術」第三章に悉く述べたれば省略することゝして茲には他の類似の状態即ち各種の病的状態と比較し其の異同何れなるかを説き示す積りである、催眠状態を普通の睡眠と同一性質であるといへる學者のある如く、また此の催眠状態を精神錯亂と同一のやうに考へて居る學者がある、即ち人為的に生せられた精神錯亂である、催眠されて居る人と狂者との相違は、一時人為的に其うされて居ると病的に發したとの差ひで、其の精神状態の性質に至つては、兩者の間に少しの相違もないのであると言つて居るのである。

精神錯亂と催眠状態

成る程催眠状態と精神錯亂との間には頗る類似の点がある、精神が錯亂すると全く人格が變り、また種々の幻覺が現はれたりする如くに、催眠状態になると全く人格の變ることや種々の幻覺を起すことがある、斯ういふ点から見ると催眠状態を人為的に生せられたる精神錯亂のやうに考へられるのであるが、併し斯ういふ類似の點はあるにもせよ、此の二つの状態の間には肝要なる点に於て、著しき相違が澤山にあるので、何うしても之れと同一性質のものとする事は出来ないのである、殊に催眠状態を精神の錯亂と同一視する學者の類似點を比較するに就て、各々其見る所が違つて居る、また精神錯亂と稱するものの中にも、色々其の種類が違つて居るものがあるから、從つて其の徵候も異なるものが現はれるのである、ところが一方の學者は或る一種の精神錯亂の徵候を以て、其れが催眠状態

の或る徵候と類似して居る所から、催眠状態と精神錯亂とが同じものだと言ひ、また一方の學者は他の種類の精神錯亂の徵候を捕へ來りて、其れが催眠状態の或る徵候と類似して居ながら、催眠状態は全く精神錯亂と同じ性質だと言つて居るのである、例へば意識の混亂といふ點から、催眠状態は人為的に生せられた狂氣だと言ひ、或は意識の衰弱の點のみを捉へ來つて催眠状態は試験的に生せられた意識の衰弱であると言ひ、または發狂者に於て一般に見るのと同様な身軀の麻痺が催眠状態に於て現はるといふ點から、催眠状態を精神病者の麻痺と同一のやうに考へて居るものもあり、中には催眠状態を以て痲痺性變愛病と同じやうに思つて居る人もあるのである、斯ういふやうに催眠状態を精神錯亂と同一性質だといふ學者の説が、孰れも區々で一致して居ないのみならず、往々全く矛盾して居るものがあるのだ、例へば一方では意識衰弱と同一視し、また一方では其れと全く性質の違つた燥狂と同じものと考へて居る、其の見る所が全然相反して居る

のであるから、催眠状態を精神錯亂と同一性質たといふ説は、到底價値のないものと言はなければならぬのである、全躰催眠状態と精神錯亂とを比較するに就ては、其の主要なる徴候に注意せなければならぬ、其處で催眠状態に於ける主要なる徴候は何であるかといふと、暗示に感應する性質であつて、此の性質のないものは決して其れを同一のものとは言へないのであるから、精神錯亂の状態には、此の暗示に感應する性質があるや否を觀察すれば、其の同一のものなるか何うかといふことが判明するのである、

催眠状態に在る人に暗示を與ふれば忽ち精神病患者と同じ状態になるので、適當の暗示をさへ與ふれば、燥狂患者の如くにも、鬱憂患者の如くにもなる、されども此れを以て決して催眠状態其のものゝ本性と言ふことは出来ない、其處でまた精神病患者は何うかといふに、暗示に感應する性質が其の至要なる一徴候となつて居るといふことは出来ない、若し假りに暗示に感應する性質が至要なる徴候であ

つたならば、精神病患者は暗示に依つて治療せらるべき筈であるが、然るに其ういふことは殆んど出来ないのである、此の一事で以て暗示に感應する性質が精神錯亂の主要なる徴候でないとは明らかなのである、また催眠状態のものは暗示に依つて精神錯亂の如くになつて居ても、一たび他の暗示を與ふれば忽ち其の状態が變じて了ふのである、精神錯亂が若し假りに催眠状態の本性であつたならば、決して斯る變化の生ずる筈がない、殊に催眠状態にあつては斯る變化を生ずるのみならず、施術者が「醒めよ」といふ單に一言の暗示に依つて、催眠状態其のものをも停止することが出来る、然るに精神病の如きは如何なる種類と雖も、斯くの如く單に一言の暗示位で直に其の状態が停止せらるゝものではない、是に於て催眠状態の性質と精神錯亂とは同一でないといふことは愈よ判然明白するのである。

### ヒステリーと催眠状態

催眠状態を精神錯亂と同一視する學者のある如くに、また催眠状態を人為的に生ぜられたるヒステリー或は神經症であるといふやうな考へを持つて居る學者もある。彼の有名なる佛國パリーの神經學者シャコーの如きは、催眠術を以て專らヒステリー患者の治療を行つて居たので、暗示に依つて神經症殊にヒステリーの完全なる模倣を生じて居る、だから催眠状態といふものは、全くヒステリーと同じ性質のものやうに考へたのである。

成る程催眠状態にある者に對して適當なる暗示を與ふれば、ヒステリーと同様な現象を生ずるには相違ない、併し其れは彼の暗示に依つて精神病患者に類する現象を生ずる場合と同じことで、全く暗示の作用であつて決して催眠状態の本性ではないのである、前々より述べたる如くに催眠状態にある者は、暗示次第で何

のやうなる變態をも現はすもので、精神錯亂のやうにもなれば、神經患者のやうにもなる、其うであるから暗示の結果として起つた現象と眠催眠状態其のものは、全く區別して考へなければならぬ、暗示に依つてヒステリー及び他の神經症の如き現象を現はすからと言つて、其れのみを以て必らずしもヒステリーや他の神經症と同一のものを見做す譯には行かないのであることは、丁度暗示に依つて精神錯亂の如き現象を起したのを以て、催眠状態は精神錯亂と同一性質であると言ふことの出来ないものである。

### 昏睡病と催眠状態

催眠状態を精神病患者や神經症患者と同一視するやうに、猶ほ他の病的状態と同性質であると考へて居る學者がある、中にも催眠状態を昏睡病と同じである人為的に生じた昏睡病だといふ意見を主張して居る者もあるのだ、彼の有名なる

ヤーコーの如きは、催眠状態を三階級に區分し、其の一つを昏睡状態と名づけた程である、而して此の昏睡病なるものは如何なる状態であるかといふに、一種奇妙なる病的睡眠であつて、此の睡眠に陥つた者は無意識無感覺になるので、人為的には何うしても醒ますことが出来ないものである、其處で其の無意識無感覺に陥つて居る點は、催眠状態の深いのと外觀上殆んど類似して居る、其れで或る一部の學者は同一のものゝやうに言つて居るのであるが、併し催眠状態は外觀上殆んど有意運動といふことは全くなくなつては居るが、此れに施術者が何か暗示を與へると、種々なる幻覺を起して其の暗示に適當する運動をする、然るに昏睡病患者に於ては其のやうなことはない、だから其の現象は全く外觀上のことに止まつて、實際に至つては大に性質が違つて居るのである、殊に昏睡病に陥つた者は、何うしても人為的に醒ますことは出来ないのであるが、催眠術を施されて如何程深い状態になつて居る者でも、暗示に依つて忽ち之れを醒ますことが出来る、だ

から催眠状態といふものは、暗示に依つて生ぜられた暗示に依つて停止されるのである、外觀上如何に深い催眠のやうに見えても、一たび暗示を與ふれば直ぐさま醒めて了ふのであつて、此れが催眠状態の特質と謂ふべきものであるのだ、また催眠状態になつて、居る者は昏睡病患者の如くに全く無意識無感覺であるやうに思ふて居る人もあるが、其れは大なる間違ひであつて、既に前章に於ても述べたる通り、深い催眠状態になると、施術者以外の人の言ふことや行ふことに就ては少しも感應しない、また催眠中にあつた事は、覺醒後に少しも其れを知らない、だから之れを外觀上より見ると、催眠状態といふものは全く無意識無感覺であるやうに考へられる、併し實際は決して其ういふものではない、施術者以外の人の言行に對しては少しも感應しないのであるが、假令何のやうに熟睡して居るやうに見えて居ても、施術者の言ふことや行ふことには一々感應するので、施術者の注意は始終施術者に向つて居るのであるから、全く無意識無感覺になつて居

るのではない、是れが即ち昏睡病の状態とは、其の性質の大に違つて居る要點である。

### カタレブジーと催眠状態

昏睡病と催眠状態とを同一のものゝやうにいふ説のある如く、カタレブジーと稱する一種の病的状態が催眠状態と同じであると考へて居る學者もある、此のカタレブジーといふものは、突然と發する病氣であつて、此の病氣に罹ると意識も感覺も消滅して了つて全く自動方を失ひ、手足などが置かれた通りに何時までも止まつて居る、だから外觀上催眠術を施された者の手足が、施術者の置いた通りに何時までも止まつて居て、少しの自動力もなくなりまた意識や感覺も共に消滅して居る如くに見ゆるのだ、同じ現象であるからして、其れで以て催眠状態は人為的に生ぜられたカタレブジーであらうとの意見が起るのである。

成る程催眠術を施された者は、カタレブジーに罹つた者と同じやうに、概して有意運動といふものは全く止まつて居る、併し之れに暗示を與ふれば幻覺を起して、其れに相當する運動をする、然るにカタレブジー患者に於ては決して其ういふことは出来ない、また催眠状態になつて居る者の四肢は、施術者の置いた通りに何時までも止まつて居て、決して自分で勝手に運動は出来ない、此の點に於てはカタレブジー患者と同じやうである、されど其の性質に於ては全く違つて居るのである、何故なれば催眠状態にある者の手足及び体軀が、施術者の置いた通りの位置に止まつて居るのは、全く施術者の言葉や其の他の方法にて與ふる暗示の作用に由るのである、されば催眠状態に於て生ずる所のカタレブジーに類似せる現象といふものは、全く暗示の作用に外ならぬのであつて、施術者の暗示を與ふることがなければ、決して斯ういふ現象の現はるゝことはないのである、だから有意運動の出来ないといふ點を以て催眠状態其のものゝ性質とし、其れで催眠



状態を以て人為的に起されたるカタレプシーのやうに考へることは出来ない、要するに斯る現象は暗示に由つて生ぜられ、また暗示に由つて變ずるのであるから、結局カタレプシーの現象とは其の性質が全く違つて居るのである、其れのみならず前項にも述ぶる如くに、催眠状態にある者が無意識無感覺のやうに見ゆるのは、單に外觀上に止まるので、實際に於ては意識や感覺は變態したのみで消失した譯でないのであるから、此の點に於てもカタレプシーとは大に異なつて居るのである。

### 麻醉及び麻醉類似病態と催眠状態

人間が麻醉剤を用ふると麻醉状態と稱する一種奇異なる状態になる、此の状態になると宛かも催眠状態に於て現はるゝ様な色々の幻覺が現はれるのである、併し麻醉剤にも種類が澤山にあるから皆一樣の状態を生ずるのではないが、麻醉剤の

うちで特に其の状態が催眠状態と類似して居るのは、亞片及び印度大麻（ハシツシユ）の如きものである、其處で催眠状態を是れ等の麻醉剤に依つて生ぜる状態と同じものではないかといふ考へを起して居る學者がある、また麻醉剤の結果と同一やうな徴候を現はす病氣があるので、其の病的状態と催眠状態とが同一性質ではないかと考へて居る人もある、而して麻醉剤を用ひた結果の状態は何ういふものであるかといふに、前に言へる印度大麻（ハシツシユ）の麻醉状態を精密に研究した學者の説に據ると、此の状態は自から催眠状態を想ひ起させる程、能く類似して居る色々の現象が現はれるのであつて、暗示に感應する性質も強くなつて來るのみならず、暗示に依つて人格の變化を生ぜしむることも出来るのである、また麻醉剤の結果に類似せる病氣も色々あつて、催眠病と稱する病氣に罹ると、丁度自己催眠の状態のやうな有様である、また馬來半島にあるラダと稱する病氣は、催眠状態に於ける摸擬状態のやうに、自分の眼に觸れたる運動を一々其の通

りに模擬するといふことである、また佛國のルーソーなどの言つて居るナルコレ  
ブシーといふ病氣に罹ると、一定の時間に眠くて耐られなくなるのである、此れ  
等の病的状態の徴候は大に催眠状態の徴候と大に類似して居るのである、其處で  
催眠状態を往々如上の現象と同一ではないかといふ説を立て、居るのであるが、  
併し此の意見は決して正當であるといふことは出来ない、何故かといふに此れ等  
の状態中、知覚が無くなるとか、有意運動が無くなるとか、或は人格の變化を起  
すとか、または模擬作用を爲すとかいふやうな色々の徴候などが催眠状態と殆ん  
ど同様であつても、精密なる研究をして見ると全然相違して居る所がある、而し  
て其の相違して居るといふ主要の點は、暗示に感應する性質であつて、催眠状態  
の特質は、此の暗示に對する感應の強なり、暗示に依つて如何なる變化をも生じ、  
また種々の徴候をも現はすのであるが、麻酔劑に依つて生ずる状態や、其他の病  
的にあつては、決して其ういふことはない、殊に催眠状態は暗示に依つて始ま

り、また暗示に依つて何時でも停止されて了ふのであるが、麻酔状態や其の他の  
類似病態に於ては決して其ういふ譯には行かない、結局は其の徴候に類似の點が  
あるに過ぎないので、其の性質に至つては全然相違して居るのである。

以上述べ來りたる如く、催眠状態を以て他の類似したる状態を現はすものと、同  
一視せんとする學者が随分あつて、種々の徴候を擧げて其れを主張して居るので  
あるが、併し到底同一性質であると確定すべきものは一つもない、催眠状態は何  
うしても一種特別の性質を有して居るものと言はなければならぬのである。

## 第十章 催眠療法施術者の人格及び必要

### なる知識

催眠術は如何なるものなるか、其れを治療上に應用すれば如何なる効果を現は  
すものであるか、また催眠状態の性質は如何なるものかなどいふことは、上來各

章に於て大略説述したる所を以て、讀者は了解せられたるならんと思ふのである、其處で本章に於ては催眠術の療法は、其の施術の方法さへ解れば何人にも容易に行ひ得らるゝものであるが何うかといふことを少しく述べる積りである。人牀の病患を治療することの容易ならざることとは、何人と雖も能く知る處であつて、施術者は須らく熱心と懇切を以て經とし、徳義と熟練とを以て緯として、従事し、飽くまでも其の責任を重んじなければならぬのである、されば醫術の如きも施術者は相當の資格ある者にあらざれば、決して其の治療を施すを許さぬのである、即ち政府は法令を以て施術者の資格を驗し而して以て、始めて之れを許すのである、然るに催眠術に於ては未だ斯る規定がないのであるから、世人は其の方法さへ解れば何人でも容易に施術されるものと考へて居るのであるが、併し其れは大に間違つた了見なのである、

既に前にも述べたる通り催眠術を施して人を催眠させるには、被術者の觀念を凝

集させなくてはならぬ、被術者の觀念を凝集させるには、施術者の人物を信用せしめて其の信念を確ふし、其の觀念をして他の事に散らさしめないやうにせなくてはならないのである、だから假令其の施術の方法を悉しく知つて居るにもせよ、被術者が其の人物に對して不安の念を生ずるとか、または厭嫌の情を有つて居るとかする場合には、到底催眠状態になるものではない、即ち被術者は先づ施術者の人物を充分に信じて居なければならぬ、例へば此の人は決して不正なことや、不親切なことや、無責任なことをする人物ではない、此の人に催眠術を施されて自分は全く意志の力を失つても、少しも不安心なことはないといふことを、被術者が充分信じて居なければならぬ、其れが若し被術者の心に、自分が催眠状態になつたならば、何のやうなことをされるかも知れないとか、或は此の人に催眠術を施されても危険なことはないか知らんとかいふやうな念慮が少しでもあつたならば、其の觀念なり或は感情なりが、自然に催眠の觀念を妨げるものである

から、決して催眠状態になるものではない、また斯ういふ場合には、被術者が自分の病患を除きたいと希望して居る所から、自分では努めて催眠せられやうと思つても、一段生じたる疑惑不安の念は、其の志意に反對して知らず識らずの間に、其れが大なる妨げとなりて、被術者は注意を催眠の一點に凝集することが出来ないのである、全躰催眠状態を生ずるの主因は、欲求の爲めではないのであつて、單に催眠の觀念が其の焦點を占めなくてはならないのであるから、被術者の念頭に懷疑不安なといふものが少しでも生じた場合には、如何ほど施術者の技量が練熟して居るにもせよ、また被術者が熱心に催眠状態にならんことを欲望して居るにもせよ、到底其の効果を生ずることは出来ないのである。

斯ういふ次第であるから、催眠療法なるものは、其の施術の方法は何人にも容易に練習することが出来るのであるが、併し其の方法を實地に施し良好の結果を収むることは、施術者其の人に由つて大に難易の懸隔あるを見るのである、されば

之れを醫師の治療を施すに比較せんか、其の難易の點に於て彼れは易く此れは難しと言ふを適當なりと考ふ、何となれば醫師は其の施術の方法をさへ修得すれば、假令患者に多少懷疑不安の念ありとするも、病患に適する藥劑を用ふれば、假令全然回復せしめ得ざるにもせよ、幾分の効果を奏することは必然なるべし、然るに催眠術に於ては一つに被術者の觀念に依るものなれば、施術者は如何ほどの技量を有するとしても、被術者の信を缺くこと即ち自己の人格に缺くる所あらんか、到底寸効をも收むることが出来ないのである、然らば如何なる人物が催眠療法を施すに適當なるやといふに、其の人格に於ては、品行方正にして徳義と信用を重んじ、よく其の責任を盡くすの人ならざるべからず、若し其れ不徳不義なる破廉耻漢ありて、陽に篤實温厚の假面を冠り、催眠術治療を爲して、世人を欺罔することあらんか、其の害毒は測り難かるべきものであらうと考へられる、特に病患の治療は貴重なる生命に關するものであるから、施術者に於ては最も注意

を要すべきものである、であるから近時催眠術の漸く發達して、世人の注意を惹くやうになり、従つて催眠術を修めて實地に應用しやうとする人も、年に月に多きを加ふるやうになつて來る所から、色々の弊害が生ずるやうになつたので、施術者の資格に就て種々の議論が起つて來た、歐米諸國に於ても各々其の意見を公にするやうになり、殊に醫術社界に於ては頗ぶる極端な意見を主張して居る人もある、また政府に於ても種々の規定を設けられた國もあるが、其の中には醫師以外の者には催眠術の應用を禁せられた所もあれば、また催眠術を施すには醫師を立會しめなければならぬ所もあり、或は放任して一向干渉しない所もあるのだ、我國に於ても近來催眠術の研究が漸々盛んになるに伴れて、色々の議論も起り、政府に於ても目下其の取締法に就ては考案中であると聞いて居る、是れは實に尤もなる事であるが、併し醫師以外の者には施術を許さぬとか、施術の際に醫師の立會を要するとかいふことは、餘り必要の無いことで、其れよりは一層適當な取

締法もあるべく、また施術者の資格に就て良規定を設けられたならば、餘りに極端なる方法に據らなくても宜からうと思ふが、茲には其のやうなことを論ずる必要が無いから、其の論は止めにして猶ほ一言せなくてはならぬのは、施術者に必要なる知識のことである、前に言へる如く人体の病患を治療するには、餘ほ恐篤なる注意を要しました、充分責任を重んじなくてはならぬ、されば醫師を以て治療をなす醫師は、生理、病理、組織、藥物等の科學を修め、而して始めて治療を行ふものである、然るに催眠術家の現状を見るに、其の多くは催眠學と心理學の一端を覗きたるのみにて、病患の因て生ずる原理を知るに必要な、生理だの病理だの、組織學などを修めて居るものは、概して無いと言つても宜からうと思ふ、而して其の催眠學や心理學の一端なりとも修めて居るものは、まだしもであるが中には唯だ催眠させる方法のみを知つて、其の科學上の知識の皆無なる者にして、自分は催眠術家であるとか、催眠術治療法に習熟して居るとか、言つて

居る自稱催眠術者が、世間には往々有るやうに見受ける、斯る無鐵砲なる施術者に治療を爲さしめんか、其の不安と危険は恐るべきものがあるのだ、また斯る無鐵砲なる施術者が、得てして不徳義なる行爲を敢てするのであるから、世間の杞憂者や醫學社界の催眠術排斥論を助成し、遂には政府が其の取締法を設けんとするに至るのである、即ち玉石ともに碎かるゝの不幸を來すのである、實に斯ういふ施術者は催眠術の發達を阻害するのみならず、世に害毒を流すことも尠からぬ徒であるから、是れ等の爲めには速く相當の規定を設けられ、眞正熱心の催眠學者及び施術者を奨励して以て、催眠術の發達を計り、且つ世人をして不安なく危険なき療法に依つて、病患の苦痛を除去せらるゝの澤に浴せしめられんことを望むのであるが、其れは兎に角眞に催眠術を研究しまた催眠術を以て治療を施さんと欲する人々は、自己の言行を改善し専ら道義と責任を重んじ、必要なる科學の知識を具へなくては、到底催眠術家として世に立つことは出來ないのである。

### 第十一章 施術に關する注意

催眠術を施して人を催眠せしむるには、被術者の全注意を催眠の一点に凝集させなければならぬのであつて、若し此の觀念の凝集を妨ぐるものがあつたならば、施術者の技量が何れほど優れて居ても、また被術者が如何ほど催眠を欲求して居るにしても、到底良好の成績を見ることが出來ないといふことは、前章に於て畧ぼ述べて置いた通りであるから、施術者に於ては須らく被術者の觀念凝集を妨ぐることをないやうに、すべての點に於て充分の注意を用ゐなければならぬのであるが、先づ第一には前章にも言へる如く、施術者が自己の人物に於て、また其の施術上の技量に於て、充分被術者から信せられて居なければならぬ、然るに此の點は全く被術者の施術者に對する感想より生ずるのであるから、言は

施術者の實際の人物技量とは全く別なのである、されば施術者の人物技量が實際充分であつても、或る事情の爲めに被術者には其う信せられない場合もあり、また實際に於ては甚だ如何はしい施術者であつても、被術者には大に信せられる場合もあるが、併し是れ等は例外であつて、事實は一般の人から其の人物技量を信じられて居りさいすれば、決して被術者の不信を招くことは無い、其の不信を來たすのは其處に必らず欠点がある爲めであるから、此れは催眠術を施す人の特に注意すべき條件なのである、其れから第二には、催眠術其のものに就いて被術者に充分安心させて置くことが必要なのである、催眠術の催眠術として世に知られるのは、其の日が甚だ淺いのであるから、世人は催眠術なるものゝ如何なる學理に據つて施さるゝものかが判らぬ、だからして其の施術に就て疑ひを懐くのは尤もな譯である、先づ催眠術を施されて催眠状態になると、其れなりに醒めないやうなとは無からうかといふ恐怖心が起る、また催眠術を施されると一時は病

患を輕快せしむるにもせよ、後日に身軀に何か害を残すことは無からうかといふ心配が起り、其れからまた催眠状態になると彼の麻酔をかけられた時のやうに、色々な事を喋つて自分の内證事を人に知らるゝやうなことはないか知らんとか、何か見苦しい醜體な言行を爲すやうなことはないか知らんなどの案じが起る、殊に婦人などに最も此れ等の恐れと疑ひを懐いて居るのが多い、實際斯ういふ恐怖心や疑惑心を起すのは、催眠術のことが判らないからであつて、言はゞ杞憂に過ぎないのであるが、被術者に斯ういふ感情が生ずる場合には、施術者の人物や技量が何れ程優れて居ても、到底良結果を得られないのである、だから始めて催眠術を施すに當つては、施術者は被術者が斯ういふ感情を起して居るや否やを觀察して、若し少しにても斯ういふ容子があつたならば、充分に其れを取り去らなくてはならぬ、即ち催眠術といふものは決して其のやうな危険のあるものではないから、充分安心して施術を受くるやうに得心させなくてはならない、催眠術

を施されて如何ほど深い催眠状態になつても、施術者が唯だ一言「醒めよ」と言へば忽ち醒めてしまふ、此れが催眠状態の特質である、また催眠術を施されても、後日に身軀に害を残すやうなことは決してない、唯だ餘り度々施されると、催眠術に感じ易くなる弊害が生ずる、併し是れとても施術者が少しく注意すれば防ぐことが出来るので、被術者が催眠状態にある間に、「お前は他の人の力で催眠されることは決してない」といふ暗示を與へて置けば、何人にも催眠されるやうな弊害は除かれて了ふのである、其れから催眠状態になつても自分で何でも喋るものではない、施術者が問ふことの外は何も語るものではない、殊に自分の内證事は施術者が其れを語らせやうとしても、中々容易に語ることはないのである、況して施術者以外の者が何を問ふても決して感じる氣遣ひはないのである、といふことを能く被術者に會得させて、斯ういふ懸念や、心配や、疑惑を取り除き、充分安心して心を平らかに穩かならしめ、其うして施術を受けしむるやうに注意

しなければならぬ、が併し被術者が斯ういう心に蟠まらぬ何もないのに、態々斯のやうなことを聞かせるには當らない、其のやうな心配も疑惑もない者に、斯ういふことを聞かせると、其の爲めに却つて餘計な懸念を起させるやうになるから、其の場合には單に「斯うして居れば樂に眠られるのだ」とか、「早く眠らうと思ふ外、何も思ふな」とか言つて置くが宜いのである、此の注意は施術者の特に心を用ひて觀察を誤らぬやうにしなければならぬ。

第三は外部の刺激である、催眠状態を起す主因は、被術者が催眠の觀念一つにあるのだから、外部のとななどは格別障りがないやうなものであるが、併し始めて催眠術を施される人に對しては、中々其ういふものではない、既に度々催眠術を施された者は、施術者の顔を見ると直ぐ催眠されるほど感應の強くなつて居る人である、場所などは何處でも差支がなく、また外部の事情が何うであらうが一向障りにはならないけれども、始めて催眠術を施される人であると、其れが大に關



係を及ぼすものである。前にも述べたる如く、催眠状態になるには、被術者の全注意が催眠の一念に凝集されなくてはならぬ。また決して其の心を他に奪はれてはならぬ。其うするには外部の事情を成るべく避けなければならぬ。被術者の注意を素すやうな刺戟は、出来得るだけ除かなければならぬのである。度々催眠術を施された人は、今復た催眠術を施されるのだと思ふと、忽ち催眠の觀念が強くなつて来て、容易に催眠状態になつて了ふのであるから、外部の事情には餘り感じないのであるが、始めての人は其ういふ經驗もなければ、其ういふ習慣もない。だから實際催眠状態になるまでには随分時間もかゝれば、また施術者も被術者も中々骨が折れるのである。殊に被術者が催眠の觀念を凝集するのが容易でない、其處で此の觀念を凝集するには、少しでも其れを妨ぐるものがあれば愈よ困難なのである。例へば其の傍に何か目につく物があると其れに注意の幾分を奪はれ、または何か音でもすると同じく其れに幾分か注意の凝集を妨げられるのである。

のみならず一つの觀念が萌すと其れに伴れて他の觀念が現はれて来る。例へば人の話し聲が聞ゆると、其れに續いて何んな人であるだらうとか、何ういふ話しをして居るのだらうかなと、考へるやうになる。斯ういふやうに外部の刺戟に由つて、何かの觀念が起る度毎に、被術者の注意は爲めに動かされるから、従つて催眠の觀念を凝集する力か弱くなるのである。多くの人の中には随分自己の意志を以て、此れ等の他より来る觀念に反抗して、注意の他に向ふことを防ぎ、催眠の一觀念にのみ注意を凝集することも出来ないこともないが、斯くの如く心を一途に傾むくる修練のある人は甚だ稀れであつて、また斯ういふ人にしても矢張り他の觀念に反抗する爲めには、其れに對して幾分か意志の働きを要する譯であるから、何うしても幾分の注意を奪はれるのである。斯ういふ具合で外部の事情の爲めに、絶えず色々の觀念が現はると其の度毎に、其れを防がんとする爲めに、催眠の觀念に全注意を集めることが出来なくなる。だから如何ほど注意を一

途に集むることに修練を積める人でも、始めて催眠術を施される場合には、外部の事情は頗る大なる關係を有するものである、殊に婦女子及び年少者の如き者は、斯る場合に臨みては到底催眠の觀念にのみ注意を凝集することが出来なくなるのは言ふまでもないことである、其れからまた外部の事情に何か氣になることがあつて、其れが爲めに注意が亂れかゝると、其れを一瞬に集めることが頗る困難である、其うなると被術者の心にはまた下の如き考へが起る、斯う注意が亂れては迎も催眠状態になれさうもない、何うかして之れを防がなければならぬと心配し始める、其うすると注意は益々亂れて来て、遂には全く催眠術に感じなくなりて不結果に了ることになる、其うして一度斯ういふ不結果を見ると、被術者の心に自分は全く催眠術に感じない性質の者ではないか知らぬといふやうな考へが起るか、或は施術者の技量が足らないのではないかといふやうな疑ひが生ずる、斯ういふ風になると再び催眠術を施さうとしても、容易に好結果を見る譯

には行かないやうになるのであるから、何でも始めの時には能く外部の事情に注意を盡して、被術者の注意を散亂させないやうにしなければならぬ、例へば音響や目に觸るゝ物に氣を附けるのみならず、室内の温度や嗅感を激するやうな匂ひや、または被術者の身軀の究屈だとか、置き具合が氣になるやうなことだとか、或は隣室に人の氣配がしたり、施術室内に被術者の厭だと思ふ人だの、極りが悪いとか耻かしいとか思ふ人などか居るとか、すべて何に限らずすべて被術者の心を奪ふものや、氣になることなどは、充分注意して其れを除くやうにして置かなければならぬ、之れを要するに施術者は、自分の身體及び施術室内の裝飾は勿論、施術の場所は成べく閑靜にして、成るべく被術者の外觀を刺戟するものゝない室を撰ぶのが、始めての人を施術するには必要なる一條件なのである、其れから最後に今一つ注意を加へなければならぬのは、被術者の附添人のことで

ある、始めて催眠術を施さるゝ人は、必らず多少危惧不安の念があるのであるから、其の念を取り去るには被術者の最も信じて居る人を立會して置くことである、其うして置きさへすれば自分が催眠状態になつても、自分の信用して居る人が附き添ふて居るから、少しも氣遣ひするには及ばぬといふ安心をする、殊に婦女子に於ては最も之れが必要である、

以上述べたる數個の注意條件は、單に施術をして容易ならしむるのみならず、世人に催眠術の危険なくして其の結果の効能多きことを紹介する一便法である、また彼の反對論者の言へる如き弊害を防ぐに於ても、最も適當なる良法と謂つべきものであるから、施術者は宜しく茲に鑑がみ、決して如上の注意を怠らざるやうにして、忠實に熱心に斯術を施し、其の効果の多大なることを世人に知らしめ、以て反對者の口實となれる弊害の除去を努めなくてはならぬのである。

— A note —

## 第十二章 治療の效果は研學と熟練とに

### 由て生ず

催眠術が一定の學術的方法に依つて行はるゝに至つたのは極く近年のことである、が併し催眠術が催眠學と稱する一定の科學に基いて行ふことになつた以上は、施術者は此の學理に充分通曉して居らなければならぬ、殊に催眠術を應用して病患の治療を爲さんとする人にありては、一層研學の必要を見るのである、若しも其の學理を修めないで施術を爲すやうなことがあると、單に治療の効果を收むることが出来ないばかりではなく、場合に由つては患者を甚だしき危険に陥れ、取り返しの附かない大事の生ずることのないとも限らぬのであるから、宜しく學理を攻究し且つ熟練の功を積まなくてはならないのである。

然るに近來の催眠術家と稱する人、殊に我國に於ける催眠術家を以て任じて居る

人々の言行を觀察するに、或る一派の中には其の言行の頗る怪訝に堪わぬところが澤山にある、元來此催眠學と稱するものは、言ふまでも無く全く心理學上の原則に基いて居るものであるから、心理學上の智識を具へて居ない人には、到底催眠學のことが眞實に解らう道理が無いのである、特に其れを應用して治療を施さうとする人に於ては、心理學上の智識が必要なるのみならず、其の他の學問、即ち生理學だの病理學などいふ科學をも修めて、其れ等の學理をも一通りは會得して置かなければならぬ、然るに心理學の一斑をも學ばず、催眠術の學理をも辨へないで、單に催眠の方法のみを何うか斯うか知り得たるのみで、催眠術を施さんとするのは、丁度生理學や病理學の一斑をも學ばないで、醫術を施さうとするのと同じ事で、實に不安心な危険極まる次第と謂ふべきである、併し我國の催眠術家が悉く斯ういふ學理を知らない人物だといふのではないが、或る一派の事には、何うも心理學だけでも充分に修めて居る人は、實際少なからうと思はれ

る、殊に生理學や病理學に至つては、恐らく十中の九までも研究した人はないであらうと思はれる、何故かといふに近時催眠術大家とか、催眠術治療施術者とか、自稱して居る人々の言行を見るに、或は催眠術速成教授とか、何日間速成法とか、種々様々に新聞紙や雜誌上に廣告して居るのが澤山にある、斯ういふことは眞の催眠術家の行爲としては、何うしても受け取られぬ始末である、既に前にも述べたる通り、催眠術なるものは、今や一定の學理に基いて施すものであるから、其の學理を能く研究し修得して居らなくては、充分の成績を擧ぐることが出来ないのみならず、若し學理をば知らないで濫りに施術を爲すやうなことがあつたならば、其れこそ如何なる危険、如何なる弊害を生ずるかば測り知られない位のものである、然るに彼の一派の人々は、如何なる新奇の名法を案出したるか發見したるかば知らねども、催眠術が數日間の教授を以て修了せらるゝと聲言するが如きは、實に無責任も亦た極まれりと謂つべきである、斯く言はば彼の人々は言はん、

數日間速成とは催眠の方法のみを教授するのみと、此れ亦た決して正當の答辨なりと認むることが出來ぬ、何となれば彼の人々も人間の身軀生命の貴重なることは承知し居るであらう、其うして病患の種類及び治療の適否に由つて、身軀生命の安危に大關係を及ぼすことは、言ふまでもなく承認し居るのであらう、而して猶ほ斯くの如き輕忽無謀なる聲言を爲すを敢てするは、斷して眞の催眠術家と稱すべきものゝ行爲と認むることは出來ない、謂ゆる新規の學術を悪用して世人を瞞着するの徒にして、斯術の爲めには獅子心中の蟲と謂ふべきものであるされば、斯る無謀悖徳の徒が輩出するので、此の有効なる學術を以て恰かも坊間路頭に技を演ずる魔術師一流と同一視せられんとし、催眠術なるものは効力少くして弊害多きものなりとの反對攻撃を受け、一般の人々に危懼不安の念を生ぜしめ、爲めに政府は其の取締法を設けらるゝの考案中なりと聞く、是れ實に前に言へる輕躁者流の一時の利勢に眩惑して、世を蠱毒するが爲めと言ふも敢て誣言に

あらずと信ず、

何れの時代に於ても一歩進んだ新らしい學説が、容易に一般に承認されないのは同じ事であつて、催眠術も亦た同じく其の轍に在るのだ、だから眞に催眠術の進歩發達を圖り、また其の裨益の多大なることを一般に承認させやうと思ふ者は、宜しく熱心にまた忠實に其の學理を研究し、種々の練磨と經驗の功を積み、其の完全なる成績を世に發表して、其うして一般に其の効能の著しく、弊害の少なきことを知らしめなくてはならぬ、また催眠術を修習して病患の治療を試みんとする如き人に取りては、先づ充分に心理學を研究して催眠術の原則を確かめ、傍ら生理學や病理學は勿論、醫術に關する學科をも兼ね修め、其うして被術者の身軀及び精神の状態並に病患の原因を診斷するの智識を具へ、其れから始めて實地の經驗を積みやうにしないで、到底完全なる治療を爲すことが出來ないのである、また技術なるものは、何事に限らず熟練といふことが大切である、如何に學



96  
402

大日本催眠術獎勵會會長小野福平校閱  
大日本心理學會會長長井正文校閱  
東京心理學館幹事宅辰次郎著

# 實驗的催眠術

日本催眠術獎勵會首領部の人々が、會長小野福平君の指揮薫陶の下に研究せし實驗施術の方法を、簡易明瞭に説き明かせしもの、其の諸種病患の治療、性癖矯正等に就ての施術上、珍談、奇話等を漏らさず載せれば、頗ぶる興味深くまた最も新術研究者に資するもの多し、されば別書「簡易速成催眠術」并に「催眠術新治療法」と共に纏綴せられれば、催眠術大家となる實に囊中の寶を取るよりも易むるべし

# 簡易催眠術

獨者が多年の研究に依て發見せる新機軸に、歐米諸大家の學說と實驗報告とを參照して、催眠術の學理と實用方法を説き示したるを、會長の校閱せられしものにして、殊に文は極めて分り易く、何人も一讀すれば容易に實地に應用せらるるやう、言文一致を用ひしもの、されば研究者、施術者は言ふまでもなく、初學者と雖も怒ら其の學理と方法を知らざることを得、本書を讀んで其後「催眠術新治療法」及び「實驗的催眠術」の兩書を併せ讀まれんか、催眠術の奧義は餘蘊なく盡くしたるものと謂ふべきなり

# 催眠術新治療法

催眠術を應用して諸種の病患を治療し、治療上諸種の情癖を矯正するに就ての最新顯著有効なる方法のみを蒐集し、また其の學理の原則と實地施術の方法とを、一讀何人にも會得せられ、且つ應用し得らるるやう、言文一致に説き示せるものなれば、催眠術に關する書中「實驗的催眠術」并に「簡易速成催眠術」と共に、研究者并に施術者の是非一讀せらるべき好材料なり

郵正實菊  
送價驗判  
稅三寫全  
六十五版  
錢錢入冊

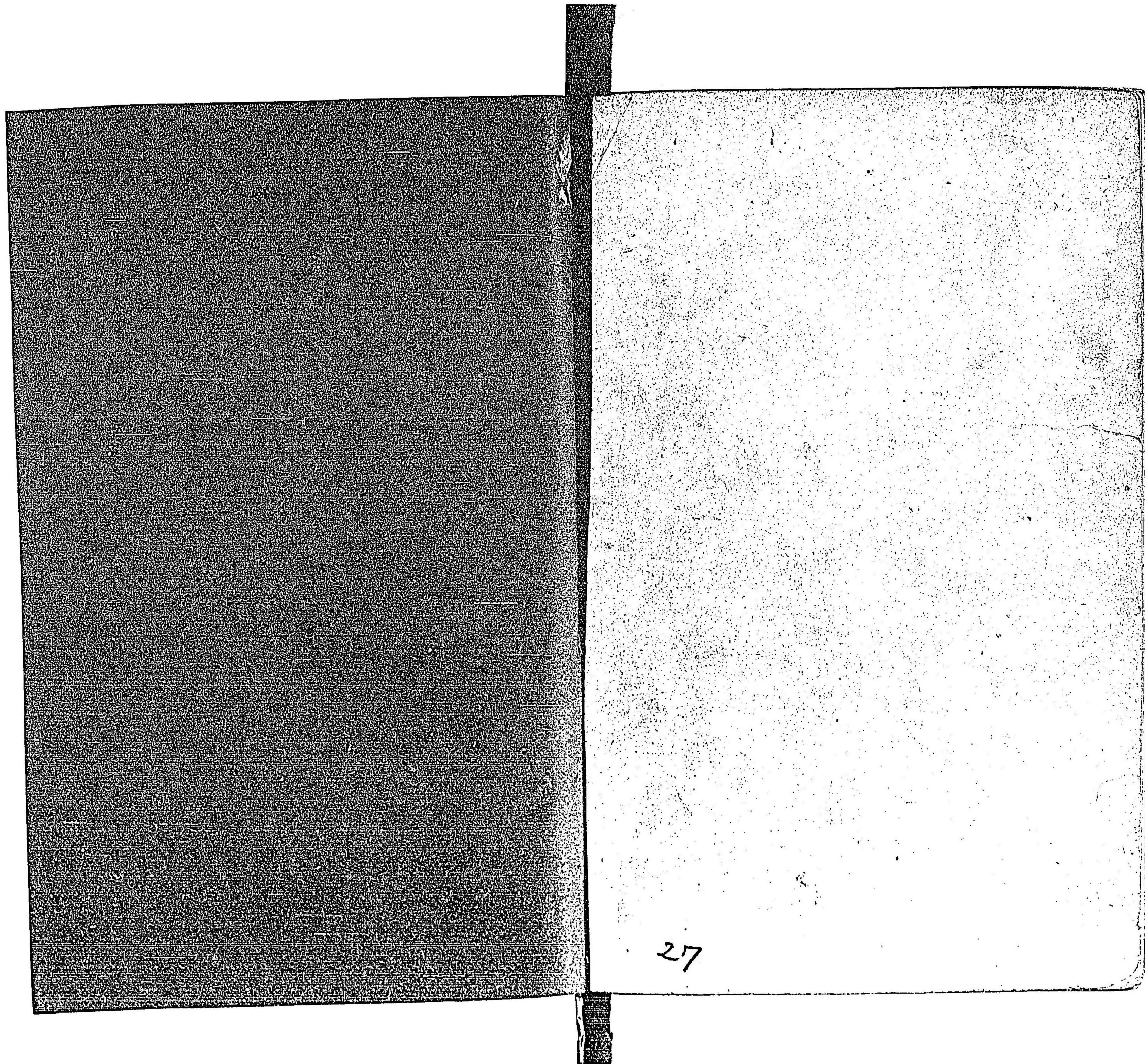
郵正實四  
送價驗六  
稅貳寫形  
十五全  
錢錢入冊

郵正實四  
送價驗六  
稅貳寫形  
十五全  
錢錢入冊

大坂市西區南堀江壹丁目 日本催眠術獎勵會

發賣所 又間精華堂

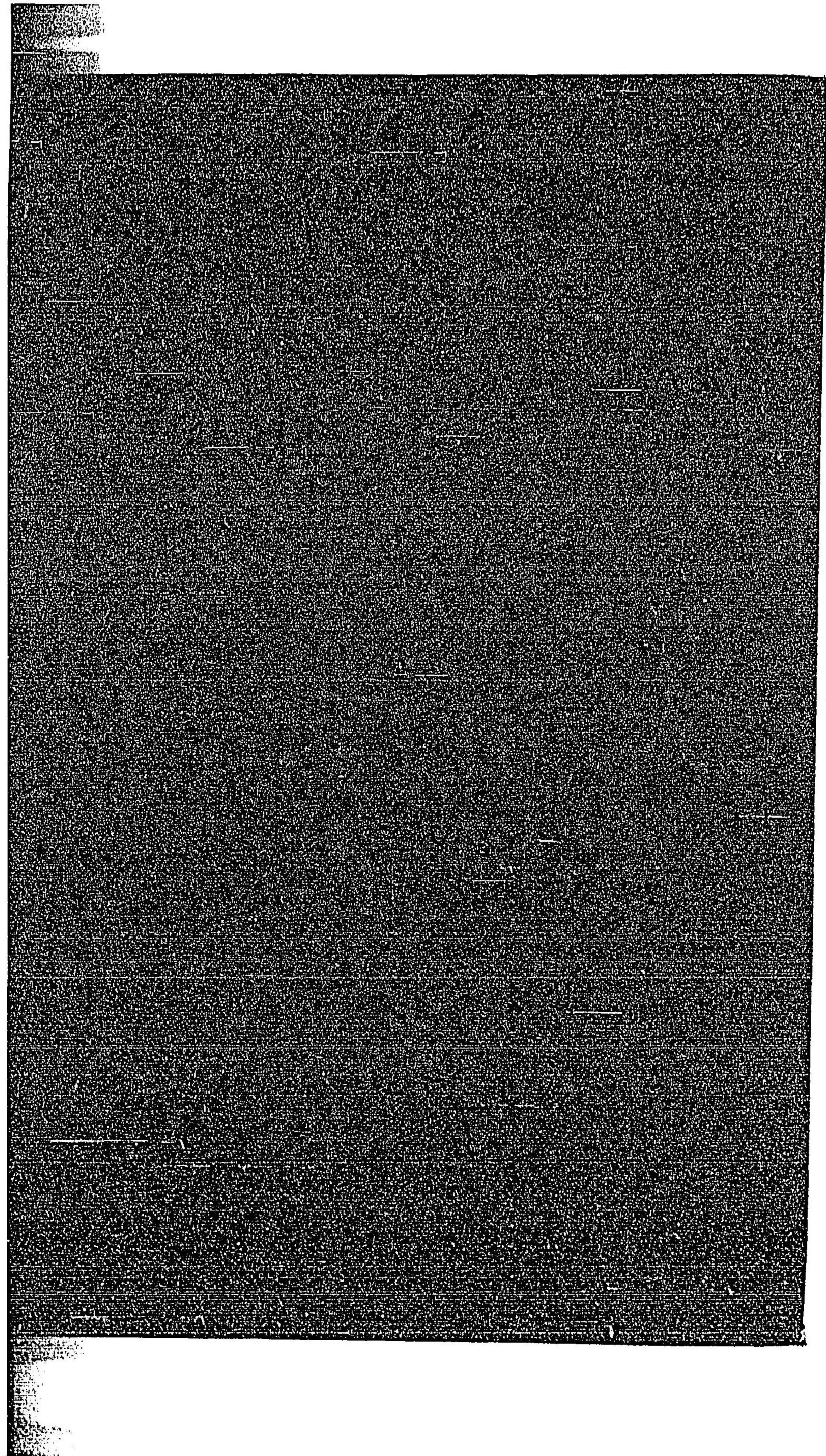
大坂市心齋橋安堂寺町西入  
電話東三三三六三番

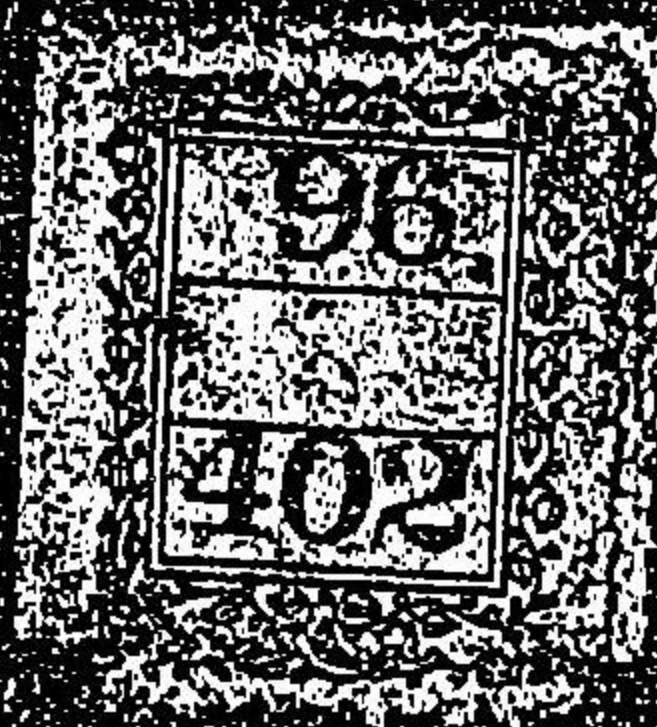


27



96  
402





058614-000-6

96-402

催眠術新治療法

山本 止/編

M37

CBC-0136

